634
205

1

0039013000

0039013-000

６３４－２０５

融和問題雜記

楠本寛・著

隆文館

昭和８

AGH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

コ-2474
531

融和問題雜記

補本寛著

隆文館版

7

融和問題雜記

楠本寛 著

隆文館版

昭和八年 帝國圖書館

634-205.

序

楠本君が今回「融和問題雜記」を上梓するに就て、何か序文を書いて呉れといふ。思へば同君とは同愛會以來の古い間柄である。今同君から序文を乞はるゝに當り、自分としても多少の感慨無き能はない。

自分が楠本君を始めて知つたのは、大正十一年の秋である。それ以來同君は絶えず自分の仕事を助けて呉れた。殊に同愛會に於ては終始一貫雜誌の編輯の任に當り、その往く所として可ならざるなき才筆は、夙に同人間に於ても、認められてゐたものである。自分のこれ迄の仕事には、同君の勞に負ふ所のものが決して尠くない。本書の出版に際して、自分が心からの喜びを禁ずる能はざるものゝあるのも、又偶然ではないのである。

今や融和運動も幾多の困難を克服して、漸く、行く所まで辿り着いたといふ氣がする。しかし、問題の前途は未だ遼遠であり、且つ益々困難である。この時に當り本書の如く、融和問題を縱横に論評した好著を得たことは、その意義決して尠しとしないと信ずる。本書が一人でも多くの人々に愛讀せられ、我國に於て最も悲しむべき融和問題解決の上に、少しでも稗益する所あらんことを、衷心より希念して止まない次第である。

昭和八年三月

有馬頼寧

序

長友補本寛君、過ぐる大正十三年以來、雜誌「同愛」及「融和時報」等に掲載せしところのもの五十數篇を蒐錄し、融和問題雜記と題して、更めて世に問はんとして、余に序を求めらる。是を通覽するに、君の日頃懷抱せる融和思想及融和問題對策を、折にふれ、時に應じて、發表せるものにて、論文あり、隨筆あり、その形體に於て、必ずしも、軌を一にせずと雖も、いづれも、凡そ言はんと欲するところを云ひ、語らんと欲するところを語り得て剩すところなき筆致に對しては、敬服せざるを得ない。

輓近、融和運動に於ても、世相の變遷と、運動それ自身の伸展に連れて、幾多の變化あり、從來の倫理的運動より科學的の運動へ、總論的のものより次第に各論的に、教化運動より、教育運動、經濟運動へ推移しつゝあることは、必然的の趨勢なりと雖

も、もともと、融和運動は、差別意識の撤廢と、差別苦の除去とによりて、閉ぢ込められたる人格の權威の復古發揚を圖る解放運動たる以上は、その教育的方法に依るも亦經濟的方策に依るも、その根柢に於ては、人格の尊嚴の認識に始まるべきものにして、その倫理性は最後まで喪失せらるべきに非ず。然れば、初期に於ける運動が倫理的方面に重點を置きしは、當然の出發點より發足したと云はなくてはならぬ。今著者茲に載するところのものは、所謂總論的のもの、倫理的のものゝ多きは、かゝる理由に依るであらう。

故に此書は、從來の融和運動の動向を知らんとする者に取つては、洵に好箇の指針たることを感ずると共に、著者自身に取つては融和運動の創業時代より、世俗に先んじて、此人道の聖戰に參加せる、靈魂の記錄とも云ふべきであらう。此書を通じて著者の融和運動に對する熱情と愛着は、廣く、又永く、江湖に紹介せられ、多くの共鳴

者を得るであらうことを信じて疑はざる者である。

昭和八年春

京都に於て

赤堀郁太郎

自序

本書は嘗て「同愛」「融和運動」「融和時報」「融和事業研究」等に掲載した雜文の類を、一冊にまとめたものである。部落の經濟的更生が、聲高く叫ばれてゐる今日、本書の如きは些か時代後れの感があるが、然し融和問題の本質が變らない以上、一面又、かういつた形式のものが存在することも、決して無駄ではあるまいと窃に自負して、敢えて上梓した次第である。たゞ今日讀み返してみて感ずることは、如何にも內容が幼稚で且つ貧しいことである。この點は內心自ら、甚だ忸怩たらざるを得ないものがある。殊に時評的なものに於ては、一層氣の抜けたビールの感が深い。がこれらの點は何卒、その時々に書き捨てたものとして御容赦願ひたい。いづれにしても、融和運動の發展期に於ける、著者のさゝやかな歩みを語るものとして、御寛恕を得ば幸

甚である。

尙、本書の上梓に際しては、先輩友人諸氏から色々お世話になつた。殊に農林政務次官有馬頼寧伯、中央融和事業協會常務理事赤堀郁太郎兩氏から序文をいたゞいたことは喜びに堪えない。記してこゝに、厚く謝意を表する次第である。

昭和八年三月五日

大井の寓居にて

著者

目次

一、問題隨感

差別問題を考へる……三
二つの思ひ出……八
同愛會五週年記念劇に就て……一三
問題と感情……一八
教育者と婦人に贈る……二一
汎く女性に訴ふ……二四
政治家と問題……二七
萠え出づる力……二九

春日閑語……三三
澤正の死その他……三五
融和運動の再吟味……三七
小言三題……四一
部落問題文藝の提唱……四四
七月の感想……四九
歳晩雜記……五二
融和運動の前衛としての青年……五六
融和運動か自覺運動か……五九
融和運動の轉換策……六三
融和運動とセンチメンタリズム……六七
議會と融和問題……七〇

問題文藝漫語……七五
隨感一束……七七
感想二つ……八〇

二、時事小言

感情を一掃せよ……八七
機會均等の實を示せ……八九
國民總動員の秋……九〇
世良田事件と融和團體の使命……九一
敬遠的傾向に就て……九二
國策樹立の急務……九四
第三者的意識を去れ……九六

國民教育と部落問題……九八
福岡聯隊事件と當局の態度……一〇〇
時言二題……一〇二
時事偶感……一〇四
第八回大會と水平運動の將來……一〇六
同人の議會進出を支持せよ……一〇九
差別的言動を取締れ……一一一
國民融和デーを意義あらしめよ……一一四
更に一段の努力を……一一七
樂園の破壞者……一二〇
政治家に訴ふ……一二三
問題文藝を確立せよ……一二五

教育者に望む……一二八
問題と小唄……一三一
青年と融和……一三三

三、問題コント

追憶……一三七
黎明を待つ心……一四〇
不安なる街……一四四
十年後……一五一

四、事實物語

迷妄より覺めて……一五七

或る結婚の話……一六三
毒を呷る女……一六八

一、問題隨感

差別問題を考へる

近世の最も偉大なる發見は、自我の發見であるといはれる。まことに今や、一切の自由、一切の平等の上に、自我は發見された。古い忘却の谷底から、自我は生々と甦つて來た。人々は玆に自分の價値を知り尊嚴を知つた。

それはとりも直さず人間意識への覺醒であつた。が、こゝに奇怪な事は、かかる時代に於て、人間が今尙ほ忘却されてゐる事である。否、人間が人間として認められず、その權利、自由の一切を、平等に享有する事の出來ないといふ事實である。そして我々はその生々しい現實を、いはゆる部落問題の上に見る。

これは實に悲しい大きな矛盾である。近世の歷史が、自我發見の歷史であるにもかゝはらず、玆には依然として人間が忘却されてゐる。こんな奇怪な事が又とあらうか。

人々は嘗て自分の中に自我を發見したやうに、それらの人々の中に自我を、否人間を發見し

なければならないではあるまいか。いや、私は斷じて誰もが、その義務を有たなければならないと主張する。何故なら、AもBも同じやうに人間だからである。同じやうに自由と權利と價値を有するからである。更に、自分の中に見出した尊い自我を、彼も又所有するが故である。

己の自我を主張するならば、彼も亦、彼の自我を主張するであらう。そしてそれは、最も當然な事でなければならない。

かくて、すべての人間が自我にめざめ、更に第三者に己の自我を發見する事によつて、お互に愛し尊敬し合ふ事の出來る日にこそ、所謂、よりよき社會は招來されるであらう。

○

水平運動は實にかかる精神の下に生れた。水平運動の精神は、人間が人間である事の主張である。嘗て虐げられ、踏みにじられた所の自我の、自我としての當然の要求である。——長い眠りの底から、そしてあらゆる苦惱と迫害の手から己れにめざめた自我、若しくは、めざめんとする自我の、悲痛なる叫びである。

人間が人間であることの主張、要求！世にこれほど當然にして悲痛な叫びが又とあらうか。

而もこの主張と要求の前に、人々は何といふ冷淡であることか。水平運動發生以來既に四年、今尙ほ悲しむべき事實の、その跡を絶たない現實を顧みる時、私は心なき社會をかなしみ、その無智を惡まないでは居られない。

人間が人間である事の主張は最も正當にして且又當然な要求である。人々はこの主張の前には躊躇なく頭を下げるべきだ。社會は寸毫もこれを割引する事なく、直にその全部を承認すべきである。しかも問題の責任は社會それ自體にある。既にその根本原因が社會それ自體に發生し、社會自らの手によつてその罪惡を成長せしめて來た以上、このかなしむべき社會惡に對しては、社會は當然どこ迄も責任と義務を有つべきである。況んやこの運動に對する批難、攻擊の如き、當然なし得べからざる所であらう。世に聞くこの運動に對する幾多の批難、攻擊の如きは、むしろ社會それ自らに向つて放たるべきものではなからうか。

○

或は言ふ。その精神に於ては、何人も異論はない。しかしその實際運動のすべてを無條件で承認する事は出來ないと。そしてこれは今日水平運動を許するものの多くの言である。

彼等はその一例として、かの徹底的糾彈をしばしば指摘し、その事によつて實際運動があまりに過激である事、且又しばしば暴力をすら伴ふ事に就て批難する。甚だしきに至つては、常に恐怖と威嚇をすら社會に與へる運動であるとなし、恰もその實際運動が根本精神に相反するものの如く之を難じる。しかも水平運動に理解を有ち、その道の識者であるといはれる人々にすら、我々は屢々この批難を發見するのである。

これは、一應は尤もな議論のやうである。しかし、嘗て梅原眞隆氏も言はれて居たやうに、眞理の主張に威力を伴はなければならない事それ自體が既に懺悔しなければならない事ではないか。その運動の過程に於て徹底的糾彈といふ武器を用ひなければならない事自體が、既に反省しなければならない事ではないか。社會は水平運動を云々する前に、何故にかゝる運動が起つたかを考へなければならぬ。そして、若しもかかる運動が發生しなければならなかつた、世にも悲痛なる根本原因を顧みるならば、今更この運動に對し、云々する資格は毫末も存しないであらう。

世の水平運動を云々するものよ。水平運動は何ものによつても云々さるべき性質のものでは

ない。水平運動は一切の批判を絶した絶對の運動である。なるほど、その過程に於ては屢々暴力を伴ひ、威嚇を伴ふ事もあらう。が社會は之を云々する前に先づ自分を顧みるべきである。それこそ、社會に許されたるたゞ一つの態度ではないか！

水平動運は人間の尊嚴を標示し、人格の絶對價値を主張する。即ち人間性の原理への覺醒である。そして更に、人類最高の完成へとばく進する。何ものかこの前途をはゞむ事が出來よう。否、この途こそまことに人類の進むべき最高至純の道である。

水平運動を承認するとか、しないとか云ふ事すら既に不徹底である。社會は自らを反省する事によつて、共に大いなる人類の意志の達成を期すべきではあるまいか。（大正十四年八月）

二つの思ひ出

貧しい庭の一隅、烈々たる眞夏の太陽の下に、向日葵は今、おほらかに咲き誇つてゐる。それは恰も「夏」と「太陽」を讃美してゐるかの如くに見える。この春無雜作に撒いて置いた種子が、何時の間にか芽生え伸び、かうして今、すばらしく大きな花を咲いてゐるのだ。その丈は、屋根にまでも屆かうとしてゐる。花の莖は、恐らく七八寸はあらう。この「夏」と「太陽」の花、嘗て天才ヴァン・ゴッホの愛した花は、見る者の眼に實にすばらしい生命力を感じさせる。殊に私にとつては、懐しい思ひ出の花でもあるのだ。

私はこの花を見る時、嘗て旅行した朝鮮の夏を思ひ出す。

それはもう、七八年も昔の事である。私は未知の祖母と叔父を尋ねて、朝鮮に渡つた事があつた。

夏であつた。始めての夜の釜山は、私の若い心にエキゾティックなときめきを與へた。私は

躍る心を抑へ、始めて會ふ祖母や叔父の面影を心に描きながら、京城に向ふ三等車の一隅に腰を下した。が、間もなくゴム風船のやうにはずんだ私の心は、重苦しい氣持に打ちひしがれて行つた。何故なら、私はそこで餘りにも痛々しい朝鮮の同胞の姿を見せつけられたからである。

その列車の中に展開された光景……。

腰掛の上に、或は列車の通路に、雜然と蹋り横はつてゐる彼等朝鮮同胞の姿……。或者は無氣力に煙草を吹かし、或者は意地汚くマクワを嚙つてゐた。彼等の顏はひとしく疲れてゐるように見え、希望といふやうなものは何處にも見出せなかつた。額には暗い淋しい影が漂ひ、眼の光りには力がなかつた。そしてひとしく物に怯えた小猫のやうに、何となくオドオドと落付がなく見えた。それはまことに、踏みにじられ、虐げられたものの姿であつた。

それに引換へ、心なき內地人の傲然たる態度！　私は胸を抑へ付けられるような息苦しさを感じ、身體の小さくなるのを覺えた。

私の心は重く、憂鬱になつた。見てはならないものを見た。何となくそんな氣がした。そして私は罪を詫びるやうな氣持で、腰掛の一隅に落付かない一夜を明したのであつた。

以來一ケ月の間、私は到る處で不幸な同胞の姿を見た。踏みにじられ、虐げられながら、尙且つそれをどうする事も出來ない不幸な同胞の相を……。

向日葵は實に、かうした遠い思ひ出を私に思ひ出させる。

あの朝鮮の不幸な同胞の、低い茅葺の家の周圍には、今年も軒よりも高く向日葵が咲いてゐるであらう。しかし、あの不幸な同胞が解放されるのは何時の日の事か。それを思ふと、私の心は暗くなる。

×

私は小學校時代に理由なく罰を受けた事があつた。私は放課後たゞ一人殘されて、受持の教師からひどく叱られた。が、何故叱られるのか、私には皆目わからなかつた。自分に覺えがあるだらう……その時教師はさう言つて、たゞひたぶるに私を責めた。が、何の覺えもない私はしくしくと泣いて詫びるより外仕方がなかつた。

それからもう二十年近くの年月が經つ。が、私には何故か、その時の事が忘れられない。Hと言つた教師の顏すら、まだはつきりと憶えてゐる。くやしいのもくやしかつた。實際今思つ

てもあんなにもくやしかつた事はない。後で間違ひだつた事がわかつても、どうしても諦らめが付かない程であつた。

やはらかな心に刻み込まれた記憶は、消えないで一生涯殘る。私のさうした記憶も、恐らく一生を通じて消える事はあるまい。初等教育の重大なる所以はこゝに在る。

私はこうした事實を思ふとき、今日、小學校の教師達が、如何なる態度を以つて部落問題に臨んでゐるかを思はずには居られない。如何に部落問題を理解し、人間を差別する事が、如何に大なる罪惡であるかを、何處まで理解してゐるかを。そしてそれを如何に兒童達に訓えてゐるかを。

元より今日に於ては、以前に見るやうな差別的事實は尠くなつてはゐやう。且つ今日の聰明なる教師諸君の中に、私は今尙ほさうした不合理な因襲などに捉はれてゐる人などがゐようとは思はぬ。しかし、私は不幸にして幼ない生徒達の間に於ける差別的事實を、今尙往々にして耳にする。この事實は果して何を物語るものであらうか。

小學校の教師諸君よ。國民教育の大任を双肩に擔ふ諸君の任務は重い。諸君の一擧手一投足

は、純眞なる兒童達の心に、永遠なる跡を貽す。諸君の美はしい人間禮讃の心は、直ちに兒童等の心にその美しい影を投げ、その賤視觀念は、直ちに兒童等の純眞な心に差別意識の芽生を植える。諸君は兒童達に人間の尊貴を敎へる事も出來れば、人間冒瀆の罪惡をも敎へる事が出來るのだ。兒童等は眞に諸君の意のまゝである。諸君は兒童等の前には全智全能であると言つてよい。

されば、小學校の敎師諸君よ。次の時代を承け次ぐべき兒童達が、忌はしき賤視觀念の所有者であるといふ事は、考へても恐ろしい事である。願くば諸君の努力によつて兒童達の純眞な心に人間禮讃の美しい觀念が刻まれ、人間冒瀆の如何に大なる罪惡であるかゞ深く印象されん事を。そのためには先づ諸君が眞に部落問題を理解し、人間を差別する事の如何に大なる罪惡であるかを知らなければならぬ。私は小學校の敎師諸君に對して、切にしかく希はないでは居られない。（十四年八月）

同愛會五週年記念劇に就て

劇による融和運動といふか、部落問題を主題とした芝居を上演したいといふことは、我々の豫てからの希望だつた。そしてたしか一昨年の夏だつたかも、當時はまだ丹靑座と言つた林君の手で、今度上演された「因襲の幽靈」を上演する事になつてゐたのであるが、上演間際になつて突如上演を禁止され、折角の希望を臺なしにされたやうなこともあつた。

以來、我々は機會さへあつたらこの豫ての希望を達したいと希つてゐたのであるが、不幸にして今日まで、その機會を與えられずにゐたのである。

さういふ譯で、この度の五週年記念劇は、我々にとつては甚だ意味深いものであつた。しかも、たゞに豫てからの希望を達することが出來たといふばかりでなく、同時に意義ある會の五週年をも記念することが出來たといふことは、二重の喜びであつたと言はなければならぬ。

○

さて、同愛會の五週年記念劇は去る七月二日から四日まで三日間、創生劇の林幹君達の手によつて國民新聞社講堂で上演された。出しものは次の三つであつた。

一、伊藤憲氏作　「選擧と路ゆく人」　七場

二、白石寛爾氏作　「源三郎のこゝろもち」　一幕

三、高田豐氏作　「因襲の幽靈」　一幕

右の中、一の「選擧と路ゆく人」は言ふまでもなく政治劇で、直接部落問題を取扱つたものとしては二と三との二つである。

「選擧と路ゆく人」は普通選擧を取扱つたもので、芝居そのものとしては實に面白いものであつたが、こゝには直接關係がないので省略することゝして、二と三だけに就て一言して置くことにする。

○

二の「源三郎のこゝろもち」は、嘗て花夢二の名で、「同愛」第三十二號に發表されたものであるから、讀者諸君は先刻御承知の事と思ふが、これは默阿彌によつて描かれた「源三郎」に作者が新らしい生命を吹き込まうと企てたもので、差別事象に對する作者の特殊な主觀が躍動してゐて、一種の悲壯美を感じさせる所のものである。

作者は作中、若侍に足蹴にされる源三郎に「憤るよりも却つて愛したくなる」と言はせ「俺れは權力階級の暴力にさいなまれて見たかつたのだ」と言はせてゐる。さうして空虛な權勢に誇り、淺ましい優越慾に滿足してゐる「人間」を痛快に嘲笑してゐる。全體的に何となく被差別者の勝利——といふやうなものが感ぜられるものであつて、部落問題を考へる上に於て一つの態度を示したものであると言つてよい。

作者白石君に言はせると、「實はかうしたこと（上演）など全然豫想して書かなかつたので……」といふ事だつたが、上演されたのを見ると、ぴつたりと板についてゐて、ぎこちない感じなど微塵もなく、どうかと思つた長い獨白もさほど目立たず、且つ舞臺效果の上から言つて

も、十二分の成功と言つてよいと思つた。ことに、何等照明裝置の無いあの講堂で、あれだけ完全な照明の效果を擧げ得たことは、何よりも大なるよろこびである。

第三の「因襲の幽靈」は同じく「同愛」第四號に掲載されたもので、或る田舍の小學校に起つた差別問題を取扱つたものである。

月田といふ女教員が部落出身である事がわかる。父兄から排斥される。それを所謂「因襲の幽靈」に捉はれてゐる二人の若い男教員が侮辱する。しかし無心な子供たちは、矢張り月田を慕ふ。月田は自分の不幸を悲しみ、無心な子供たちを思つて泣く。それを、最初から月田を部落出身であると知つて採用してゐた老校長が慰めるといふ筋のもので、作者はそこで老校長を通じて燃ゆるが如き人間愛を高潮し、部落問題が溫かき人間愛によつて初めて解決されるものであることを訓へてゐる。

これも同樣豫期以上の效果を收めた。殊に林君の扮した老校長は流石に手に入つたものであつた。簡單な舞臺裝置も却つて全體の效果を助け、山口眞瑳子君の女教師月田も自然だつた。

○

以上、今度の五週年記念劇は幸にして豫期以上の效果を收め、且つ多大なる感銘を多數の觀客に與へることが出來た。我々のよろこび、これに過ぐるものはない。

擱筆するに當つて、この度の芝居を義俠的に引受けて呉れた林幹君、演出に舞臺裝置にいろいろ御面倒かけた村山知義君、俳優諸君、並に多數の觀客諸君に對して深甚なる謝意を表して置く。(十五年七月)

問題と感情

部落問題はよく感情の問題だと言はれる、しかし、部落問題に對して、特にさう言はれるのはおかしい。人間が感情の動物である以上、考へやうによつては、世の中に感情の問題でないものはない。が、それは兎に角さういふ人達は決つて、理窟ではわかつてゐる、從て、もう議論の餘地はない、たゞ殘されてゐるのは感情の問題である、といふやうな事を言ふが、しかし私に言はせると、さういふ人達こそ、その理窟すらもわかつてゐない人である。でなければ、理性の何ものたるかを知らない人である。

言ふ迄もなく、感情といふものは、元來最も動物的なものである。そして人間の尊さ、萬物の靈長たる所以は感情を制御する力、即ち理性が發達してゐるからであるとは、夙に小學校から敎へてゐる所である。事實、聰明なる人間ほど、感情は理性で制御して行く。これは、文明人と野蠻人とを比較して見ても、直に首肯出來るところである。

然るに、部落問題に對し、之をたゞに感情の問題なりと斷じて恬として恥ぢざるが如きは、餘りにも無責任な態度であると言はなければならぬ。のみならずそれは、期せずして、自分の無智を暴露するものでもある。

私は部落問題に對し「何となく嫌だ」とか「理窟以上の問題だ」とか言つて恥ぢない人間のある間は、部落問題の前途は、未だ遼遠だと思ふ。

○

しかし、人間が感情の動物である以上、その感情を無視する事は出來ない。殊に、部落問題に於ては、理窟は兎に角として、事實に於てこれを感情の問題なりと考へてゐる人々の多い以上、その啓蒙運動も感情を對象に置く事が必要である。單に効果の點から言つてもその方がより効果がある。藝術運動の必要は、實に玆に存する。そしてその爲めには、直接感情にアツピールするもの、即ち文學若しくは演劇が選ばれなければならぬ。

部落問題も、今や持久戰に入つた形である。如何なる運動でも、その第一期は比較的容易である。その効果も華々しいものがある。しかし、第二期に入ると、運動は益々困難となる。そ

の割合に効果は目に見えない。概して持久戦といふものは苦しいものである。しかも、第二期は第一期よりも、更に大切な時代である。部落問題も眞にこれからだといふ氣がする。

この時に當つて、私は藝術運動の更に肝要なるを思ふ。運動の困難なる時代であるだけ、それだけ、効果的な運動方法を選ぶ事は、少くとも必要であらうと思ふ。（十五年九月）

教育者と婦人に贈る

僅か十三歳にしかならない少年が、呉市の近郊で鐵道自殺を遂げたといふ話はあまりに有名な話だ。同時に、幾度聞いても潸然たる涙を禁じ得ない話だ。その少年が自殺を思ひつめた氣持、線路の傍に立つて、幾度か涙ながらに自分の年を數へた氣持、その氣持を思ふと全く心臓の止るような、たまらない思ひがする。事實、世の中にかくも痛ましい話は又とあるまい。

彼は、所謂部落出身の少年であつたが故に死ななければならなかつたのだ。理由は單にそれだけである。それ以外に何ものもない。何といふ不合理な亂暴極まる話であらう…。その罪は誰れに在るか！

元より冷やかな氷のやうな社會に在ると言ふ事が出來る。しかし私は思ふ。もう少し彼の學校が、教師が、學校友達が、温かだつたならば、恐らく彼の少年もあゝした痛ましい死を遂げなくとも濟んだであらうに、と。そして私は、この話を思ひ出す毎に、小學校に於ける差別問

題の、一刻も忽せにすべからざることを思ふのだ。

○

これは單なる一つの事實、一つの話に過ぎない。が同時にそのすべてでもある。

元より、今日小學校に於ける差別問題は、以前に比すればずつといゝ狀態に在ると想像出來る。しかし、我々は依然として幾多の痛ましい事實を見聞する。そしてこの事はそれが如何なる關係に於て發生する事實であらうとも、一方に於ては何も知らない罪なき兒童が、堪え難き差別苦に惱みつゝあることを意味し、他方に於ては多數兒童の純情がけがされ、不知不識の間に忌はしき賤視觀念の所有者となりつゝあることを意味する。これほど殘酷な、恐ろしいことはない。それが純眞無垢な兒童であればあるだけ、問題は深刻重大である。私が特に教育者と婦人に向つて一言したいと思ふ所以も實に此處に存する。

年少の時代に於ける教育の重大なる所以は、今更言ふ迄もない。その時代に受けた感化影響の如何に一生を支配するかを考ふれば、論を俟たない所である。國民教育の重大なる以所も一に此處に存する。

然るに、現在の狀態は果してどうであらう。私は不幸にして、少くとも部落問題に關する範圍内に於ては、滿足する事の出來ない狀態にあるのを悲しまざるを得ない。之はあながち學校に對してのみ言ふのではない。家庭に對しても同樣である。それは學校に於ては教育者が、家庭に於ては婦人が未だ部落問題を充分に理解してゐないからである。人間が人間を差別することの、如何に不合理にして許容すべからざる罪惡であるかを十分に自覺してゐないが故である。そしてかういふ狀態の下に教育される兒童が、如何に不幸であり、且つ部落問題の見地から見て、如何に遺憾千萬であるかは論を俟たない處である。

○

部落問題はあらゆる方面から、それこそ國民總動員的に解決を急がなければならない重大問題である。而して、今や漸やくその機運に向ひつゝあることは喜ぶべき事であるが、私はこの秋に當つて、特に教育者と婦人に向つて覺醒と奮起を促したい。そしてあらゆる學校に於て、家庭に於て、美はしい人間愛の泉が湧き、一日も早く今日見るやうな、悲しむべき事實のその跡を絶たん事を希願して止まないのである。（十五年十月）

汎く女性に訴ふ

融和問題は、人道上の大問題である。のみならず、國家的立場から見ても、一刻も忽せにする事の出來ない重大問題である。これ部落問題があらゆる社會問題中、最も重大なる社會問題であると言はれる所以であつて、この問題の解決せざる限り永遠に日本は救はれない、と言つても決して過言ではない。

然るに、部落問題の現狀は果してどうであらうか。

○

部落問題解決の方途としては、現在凡そ次の三つの運動施設が爲されつゝある。

第一は、自主的解放を目的とする所の水平運動であり、第二は、全國融和聯盟を中心とする全國の融和團體によつて爲されつゝある所の、國民反省の融和運動であり、第三は、現在政府によつて爲されつゝある所の、社會政策的改善施設である。

斯くて、現在部落問題に對しては、水平社、融和團體、政府の三者によつて、各々運動施設が試みられつゝあるのである。而して、それぞれ相當の効果を擧げつゝある事も事實である。しかし、問題の前途は今尙ほ混沌として解決の曙光だに認められず、悲しむべき人間冒瀆の事實は、未だ頻々として、その跡を絕たない有樣にある。これ、果して何が故であらうか。

○

吾人はそれに對して躊躇なく斷言する事が出來る。それは一に、社會が冷淡であり、無關心であるが故であると。從て人間が人間を差別する事の如何に許すべからざる罪惡であるかに就て考へる事なく、依然として嗤ふべき因襲、唾棄すべき封建的思想を以て當然なりとし、人間性の原理に覺醒しないが故であると。殊に吾人は女性の世界に、より多くその事實を見るのを甚だ遺憾に考へる。

女性のみが賤視觀念の所有者であると、決して言ふのではない。が、男性よりもより多く感情に生きる女性は、それだけ冷靜なる理智の光を受け入れる事を拒む。だから古來理由なき迷信を固守するものはより多く女性に多い。同樣に、部落問題に於ても、封建的賤視觀念に鞏さ

れてゐるものはより多く女性である。故に部落問題解決の第一歩は先づ女性の覺醒でなければならない。殊に本問題の解決は人の母であり家庭の教育者である所の女性に負ふ所が極めて多い。否女性を措いてこの問題の解決は、到底期し得られないと言ふも過言ではない。それ程部落問題に於ける女性の立場は重要である。

○

まことに部落問題は總ての人の手に依つて解決されなければならない、國家的重大問題である。しかも、この問題の解決は女性の力に俟つもの極めて多い。吾人が特に女性に向つてその理解と覺醒を促す所以も實に此處に存する。

願くば滿天下の女性よ。諸姉等が自らこの問題の前に覺醒する事は勿論、更に進んで諸姉の持てるその美はしき感情、その溫き愛をもつて、積極的にこの悲しむべき問題解決のために最善の寄與を致されん事を。これ吾人の衷心よりの希願である。（十五年十一月）

政治家と問題

政治家が部落問題に目覺めて行くのはうれしい。無產政黨は元より、既成政黨までこの問題を重要なる政策の一部として揭げるやうになつた。一つは普選を見越しての看板塗り替えといふ所もあらう。しかし決してそればかりではない。來るべき時代が來たのだ。も早や放つては置けなくなつて來たのだ。我等は現在政治家諸氏がこの問題を眞にどの程度まで理解してゐるかは兎も角として、かうした事實を見る時、既往を顧みて轉感慨なき能はないものがある。

○

だが思へば隨分長い間、この問題は政治的に無視されて來た。我々はどれだけ今日ある事を待つたらう。そして何故にもう少し早く、この問題に氣付いて呉れなかつたかを怪しむ。

或は一つは時代のせいもあつたかも知れぬ。又この問題の持つ特異な性質にも依る所があらう。しかし、この問題が今日まで、かく政治的に顧みられなかつたのは、一には從來の政治家

の無關心と冷淡にも依るものである。これは何と言つても爭へない事實である。

○

我々は部落問題が、單に政治のみによつて解決するものとは毫も考へない。確乎たる國策の確立は元より必要だが、同時に國民全體の協力に依る大なる人間運動を必要とする事は言ふ迄もない。しかし、部落問題は從來あまりに政治的に顧みられないで來た。政府も政治家もあまりに冷淡であつた。この意味から言つて、今日政府に國策の確立を要求し、政治家の理解を促進する事は何よりの急務でなければならぬ。

この秋に當り部落問題の上に、政治的機運の向いて來た事は何よりも喜ばしい。我々はこの問題が政治的に益々重要視せられて來ると共に、一日も早く確乎たる國策の確立されん事を祈つて止まないものである。（昭和二年二月）

萠え出づる力

毎年のことながら、この頃早春の夜獨り靜かに書見などしてゐると、何となく萠え出づる力といつたやうなものが感じられて來る。烈しい冬が過ぎて萬物が甦らうとしてゐるのだから、そこに自づと宇宙の生氣が動き、その躍動する氣配が斯く感じられて來るのではないかと思ふ。殊に靜かに春雨の灑ぐ夜などは、そこに更にかぐはしい一種の香氣さへも感じられて來る。都會に住つてゐるお蔭で蛙の聲は聞くことが出來ないが、これから春を呼ぶ蛙の聲も、一層この萠え出づる力を感じさせるものである。

×

融和問題の上にも同じやうに、私は今萠え出づる力を感じる。融和問題は今正に早春の時代にあるやうに思ふ。水平運動が凋落し、融和運動又行詰つた今日の時代は一見極めて不振の時代のやうに見える。しかし、それは皮相な觀察であつて、恰も早春の頃、地上一點の見るべき

線はなくとも、地下には徐々として萌え出でんとする用意がなされつゝあるやうに、融和問題の上にも眼に見えない潑溂たる生氣が澎湃として漲りつゝあることを見逃すことが出來ないのである。即ち、水平運動は今日こそ萎微不振の極にあるが、やがて更生せんとして脈々と動きつゝある新らしき氣運を到る所に感知することが出來る。又、融和運動に於ても、最近内部的自覺の問題が新らしく論議せらるゝに至つたが、これなども明らかに融和運動の轉換を物語るものとして何よりも心強く思はれる。

斯くの如く、表面は一見極めて不振なるが如くに見えるこの問題も、その内部を仔細に觀察すると、萌え出でんとする生氣が潑溂として躍動しつゝある事を知ることが出來るのである。

×

由來、融和問題に對しては、極端に悲觀説を唱へる人と、反對に樂觀説を唱へる人とがあるやうである。しかし、その何れに於ても、どうやら確乎たる根據は無く、たゞ何となくさう思はれると言つた程度に過ぎないやうである。事實神様でない限り、これは誰れにもわからないことである。が、とも角この兩様の論者のあることだけは確かである。所でかうした論者はそ

の何れにしても、問題を一定不變のものとして、しかも一定の角度からのみ眺めてゐるやうである。即ち之を毫も辨證法的に見ようとしないのである。だから刻々に流轉變化する複雜な問題の姿——過程は常に認識の視野から沒却され勝である。それ故に一方に偏した、かうした極端な問題觀が生れて來るのである。

悲觀説を唱へようと樂觀説を唱へようと、それは銘々その人の勝手であるが、しかしかうした認識不足の問題觀は、問題そのものの上には決してよき影響を齎らさない。徒らに悲觀したり樂觀したりすることはお互に禁物である。正しき認識の下に、しつかりと問題を把握することこそ、我々の心掛けなければならない第一事である。

×

今日を問題不振の絶頂であると考へる人もあらう。だが歴史を信ずる者にとつては希望多き時代である。この意味に於て私は悲觀もしなければ樂觀もしない。たゞあるがまゝの過程を眺め、希望を明日に繋ぐだけである。やがて春が來る。今萌え出でんとしつゝある力は、地殼を破つてやがて一齊に萌え出づるであらう。私は融和問題の上にも間近き春を感じる。(四年二月)

春日閑語

春が來た。花が咲いたと思つた。が、春は既に逝つて花はもう散つてゐる。そして殘るものはたゞ限りない憂鬱ばかりである。なんて言へば、お前は一昔前の詩人だよ、などと笑はれるかも知れない。だが、どつちにしても現代人が憂鬱であることだけはたしかだ。

或者は之を目して世紀末的憂鬱だなどと云ふ。がそんなことはこの際どうでもいゝ。とに角憂鬱なのである。そのため、或者は映畫を見、或者は飛行機に乘り、或者は銀座を歩いてその憂鬱を忘れようとする。今日のジャズ的文化は要するにかかる傾向の生んだ文化だ。して見ればジャス的文化とは要するに憂鬱文化の同名異語に過ぎないではないか、などと、ようやく出揃つた木々の葉ツぱを眺めながらそんなことを考へてみる。そんなことを考へながら依然として私は、問題的にも更に二重に憂鬱である。

×

印度は今日二人の世界的天才を有する。その一人はガンヂーであり一人はタゴールである。東洋に於ける所謂弱小民族の中から、かかる世界的天才の生れたことは大なる皮肉でなければならぬ。

その中の一人、ラビンドラナート・タゴールが此間日本にやつて來た。彼の日本訪問は今回で三度目だが、何でも今度はカナダに、「閑散の哲學」を講演に行く途次、彼に言はせると「愛する日本」へ寄つたのださうである。その彼の講演を今回親しく聽くことが出來た。講演と言つても彼のやつたのは彼の傑作「ベンガルの詩」の朗讀だつたが、しかし私は彼の童顏から迸り出る銀鈴を振るやうな美しい聲を聞きながら、ともすれば思ひはぼうぼうたる見知らない印度の上に走つた。その民族の上に、又その解放運動の上に。そして彼がやがて詩の朗讀を終つた時私の頭をかすめた幻影は、甦へらんとする「若き印度」の姿であつた。

×

春とともに、各地で融和團體の大會が催される。沈滯した運動の上に與へられる、年に一度のせめてもの刺激だ。しかし、何時も云ふやうに、大會によつて僅かにその存在が知れるやう

では融和運動も情けない。その大會もしかも、ともすれば一場のお祭り騒ぎに終り勝で、後に殘るものはたゞ、火の消えたやうな佗びしさのみである。こんなことでは何時まで經つても融和運動のウダツは上らない。我々は何時まで、こんな狀態をつゞけてゐなければならないのだらう。

燃え上る火が欲しい。皆して火を燃え上らせろ。

一切の不合理と因襲を一齊に燒きつくせ。どうか今年の大會は、この火を燃え上らせる準備であつてほしいものだ。（四年四月）

澤正の死その他

劇壇空前の人氣を背負つて立つてゐた澤正が死んだ。曩に小山内薫氏を失つた我國の劇壇はこれで二つの大きな存在を失つたことになる。劇壇に人なき時、この二人の死は實に淋しい。が殊にこの際我々にとつて殘念なのは、この二人が共に部落問題にとつて、相當因緣の淺からざるもののあつたことである。卽ち小山内氏は嘗て「破戒」の映畫化を企てたことがあつたかに聞くし、澤正また問題の理解者として、近く一席の感話を聞くべく我々は期待してゐた。

然るに今やそれらの一切は空しくなつて了つたのである。この二人の死が我が劇壇にとつて如何に大きな損失であるかは今更言ふまでもないが、以上の點から言つて問題の上からも實に殘念な氣がする。問題のためにもこの二人は今少しく生かして置きたかつたものだ。

×

關東水平社が陣容を立て直して新らしく出直すといふ。大阪でも最近旗揚げの會合があると

か。春とともに凋落した水平運動が甦らうとするのは喜ばしい。顧くば昔日の隆盛に返つて、この沈滯した空氣を一掃して貰ひ度いものだ。しかし、思ふに水平運動はこれから益々困難な時代に入つて行くであらう。それだけ今後の運動には大いなる忍耐と努力が必要とされると見ねばならない。その點萬々ぬかりはないであらうが、覺悟だけは今から肝要だ。それにしても嘗て過去に於て嘗めた幾多の苦杯は、今後貴重な經驗として、大いに役立つであらう。とまれ水平運動は新らしく出發するといふ。我々は靜かにその首途を見守らう。（四年四月）

融和運動の再吟味

融和運動が內部同胞の自覺に對して働らきかけることがいいか惡いか、といふよりも、べきかべきでないかといふことが近來問題となつて來たやうである。この問題は既に昨年末京都で開かれた融和事業大會に於ても提案せられてゐたやうであるが、これは融和運動最近の傾向を物語るものとして注目すべき現象であると私は考へる。卽ちこの事實は、融和運動が今や新らしき指導精神を必要とする轉機に迫られてゐることを示すものであると同時に、歷史的には運動自體の發展を物語るものとして大なる興味があると考へるのである。

この意味に於て、この現象は極めて重要なる意義を持つ。今後の融和運動を如何に指導し進展せしむべきかの問題は、一にかかつてかゝる傾向を如何に批判し指導するかにあると言ても過言ではない。

○

しかしながら、かゝる問題が今更事新らしく論議されなければならないことは、それ自體融和運動に對する認識不足を物語るものであると思ふ。私はかかる現象を見るにつけても融和融動が從來如何にいい加減に考へられてゐたかを思はざるを得ない。この問題は大體に於て今日議論の餘地は無いやうに見受けられるが（それはあまりにも當然なことである）、問題はその事よりもむしろ、かかる問題が今更問題とされなければならないといふこと、そのこと自體にある。そしてそこに考へなければならない重要な問題があるのではないかと、私は考へるのである。何ものがかかる認識不足を來さしめたか。

之に對して私は第一に言ひ度い。それは從來融和運動そのものゝ正體が、あまりにも朦朧としてゐたからであると。

試みに從來の融和運動が凡そ如何なるものであつたかを考へてみるがいい。融和運動とは、從來時に反省懺悔の運動であり、時に差別撤廢の運動であり、時にはまた內外融和のためのそれであり、更らに時には融和事業とさへも混同されてゐたではないか。かくて、融和運動とはそれら雜多なものの上に漫然と冠せられた名ばかりの總稱に過ぎず、卽ちそこにさういふ單一

な運動があつたのではなくして、その實質は銘々勝手な解釋の下に、その觀念を異にしながらバラバラに存在してゐた幾つかの運動の謂に過ぎなかつたのである。故に、その何れが果して融和運動の眞の實體であるか、我々は先づその發見に苦しまなければならなかつたと言はなければならない。從來の融和運動が既にかゝる狀態にあつた以上、そこに認識不足を伴ふのは誰しも無理からぬことである。

そこで、かかる問題が今更問題とされなければならない當然の理由が發生して來る。如何となれば、融和運動が單なる反省懺悔の運動であると考へてゐる者にとつては、それが內部同胞の自覺にまでも働きかけることは、明かにその使命目的の埒外に屬することだからである。同じように、これを單なる差別撤廢の運動であるとなし、或は所謂內外融和の運動であると爲す場合等に於ても同樣である。卽ち之等の場合に於てはそこに議論の餘地の生ずるのが當然であつて、問題の起らないのが寧ろ不思議なのである。斯く考へ來る時、我々はかかる問題の問題とされることの、決して怪しむに足りないことを思ふ。同時にかかる事實に基いてみても融和運動は今こそ淸算され、再吟味されなければならないのではないかと痛切に考へるのである。

○

融和運動の本質、言葉を換へて云へば融和運動とは何ぞやの問題は、嘗て屢々論議された。そして恐らく今後と雖も屢々論議されるであらう。かく如何やうに論議されようとも、問題そのものの本質が明確に認識されない限り、結局不徹底に終るであらうことを私は斷言する。この意味に於ても、我々は先づ問題そのものの本質をこそ、はつきりと摑むべきではなかつたか。

融和運動今日までの過程は、其歴史的必然に當然過程しなければならない所であつたかも知れぬ。だが、私は今にしてその正體のあまりにも朦朧たりしことに想到せざるを得ない。これ偏に融和運動が從來問題に對する確乎たる立場を持たなかつたが故である。從來の融和運動に一貫したる觀念が缺如し、又そこに何等見るべき指導精神の無かつたのも一にその爲である。融和運動今日の不振、又一にそこに胚胎してゐると言はなければならぬ。されば今日我々の何よりの急務は、かかる融和運動を再吟味し清算することによつてその眞の實體を發見することでなければならぬ。而してそれは、問題そのものの本質をはつきりと見究めることによつて、始めて可能とせられるであらう。（四年四月）

小言三題

先頃、東京朝日新聞の報ずる所によれば、全國水平社では、今度部落問題を提げて國際聯盟まで乗り出すとのことである。部落問題の國際的進出は寧ろ當然なことであり、又その意義も大なるものがあることと大いに賛意を表したい。だが、思ふにそれは運動の國内的充實と相俟つて始めて意義あることであつて、それ自體單獨ではさしたる効果は期せられないであらう。それは恰も母屋があつて、初めて廂がその用を爲すと同樣である。この意味に於て國際的進出も結構であるが、先づ運動の國内的充實を圖ることが何よりの急務ではあるまいか。全國水平社今回の企圖に對しては元より賛意は表するが、今日の如く、その母屋の存在が至極もうらうたる時に於て、國際的進出を急ぐが如きは、少しくその本末を顚倒するものではないかと考へる。廂ばかりの水平運動にならずんば幸である。

×

この頃痛感することは、問題關係の機關紙の寥々たることである。之を數年前に比べると、何といふ減り方であらう。先づ、水平運動の戰線に就てみても、今日機關紙として往時の面目を維持してゐるものが果して幾つあるか。今日に於ては僅かに水平新聞その他一二のものが、辛うじてその命脈を保つてゐるに過ぎないではないか。翻つて融和運動方面を眺めてみても同樣である。今日眞に問題の機關紙たるに價するものは全國に於て僅かに四、五を數へるに過ぎないであらう。顧みて轉た寂寥の感に堪えないのは、敢て私ひとりのみではあるまい。かかる現狀を見るにつけても、あらゆる運動が今や如何に萎微不振の極にあるかが思はれる。かう言つたからとて機關紙の數を以て運動の幅を測る譯では元よりない。が、一事が萬事といふことがある。一事が萬事この調子では前途が全く心細い。願くばせめて機關紙だけでも往時の隆盛に歸らしめよ。衷心全く、さう叫びたくなる。

×

融和運動が行詰つたといふ聲を聞くかと思へば、融和運動黃金時代說を耳にする。融和運動が行詰つたといふ聲も本當であれば、融和運動黃金時代說も又眞實である。かくて、この二つ

の眞實を兼ね具えたものが、決して皮肉でなしに今日の融和運動の眞の姿である。如何となれば、同時に發せられるこの二つの聲は、實に今日の融和運動の質と量を物語るものだからである。融和運動今日の現狀は正しくその通りである。即ち、運動そのものは全く手も足も出ない八方塞りの形にあるが、その陣容に於ては全國三十有餘の融和團體を數へ、古今未曾有の盛觀を呈してゐるのが今日の融和運動である。そこで、こゝに殘された問題は、その孰れに組するかといふことである。質か量かの問題である。行詰りを慨くべきか、それとも、全國三十幾つの融和團體を誇るべきかの問題である。重ねて言ふ、その孰れに組するべきか。知つてゐる者は手を擧げること、である。（四年五月）

部落問題文藝の提唱

一

我々はハリエット・ビツチヤア・ストウ女史の「アンクル・トムス・ケビン」が、奴隷制度撤廢の上に如何に偉大なる貢献をなしたかを知つてゐる。或ひは又イブセン、トルストイ等の作品が、或は婦人解放運動の上に、或は農民解放運動の上に如何に重要なる役割をつとめて來たか、等々に就ても……。かうした例は數へ擧ぐれば枚擧に遑が無いであらう。かくて文藝があらゆる解放運動史上に於て、如何に重要なる役割を演じ、現に演じつゝあるかに就ては、最早や説明を要しない所であるとともに、延いては之が重要性に就ても、これ又論を俟たない所である。

然るに今、部落問題に就て之を考ふる時果してどうか。我々は過去に於て如何なる問題文藝を有するであらうか。

二

問題文藝といふ意味を廣義に解するならば、即ち廣い意味に於て問題を取扱つた作品といふことに觀るならば、我々は過去に於ても相當多くの作品を有するであらう。だがそれらの作品の多くは、何れも部落問題を單なるテーマとして取扱つてゐるに過ぎない。從て問題文藝といふ見地よりすれば、何れも甚だ距離の遠いものである。のみならず、今日問題の上から考へて遺憾なものが甚だ多い。私は今こゝにそれらの點に就て一々例證する餘裕を持たないが、一例を擧げると、この問題が單なる興味の對象として取扱はれてゐるが如き、或はその結果が安價な同情の押賣りに終つてゐるが如きは、單に問題の上から考へて感心出來ないばかりでなく、却て問題そのものの本質を誤るものと言はなければならない。この意味から言つて、之等過去の文藝作品の多くは、單に問題文藝としての價値を見出すことが出來ないばかりか、いさゝか有難迷惑な存在でさへもあると考へる。

之等の中にあつて、僅かに見るべきものがあるならば、それは島崎藤村氏の「破戒」である。「破戒」は今日より考へても、たしかに問題文藝といふに價するものである。殊にこの一卷は

水平運動の若き先驅者達を奮起せしめる上に於て、與つて力があつたかに聞いてゐる。してみるとこの一卷こそは部落解放運動史上に於て、最も重要なる地位を占めなければならないものと言はなければならない。

しかし、嚴密に言へばこの「破戒」すらも、その意識に於て、その扱ひ方に於て、今日我々の希求する問題文藝よりすれば遙かに遠いものである。勿論、我々はそこに時代的な隔りを無視することは出來ないが、その上に於ても尙且つ幾多の不滿を見出さざるを得ないのである。

三

斯く考へ來る時、我々は嘗て問題文藝らしき文藝を所有しなかつた、と言つても過言ではない。そしてこのことが問題にとつて、如何に大なる損失であつたかは改めて言ふまでもない。しかも、文藝がこうした問題の上に持つ役割の益々重要なるものあるを思ふ時、我々は眞の問題文藝の出現を、痛切に翹望せざるを得ないのである。私が敢て問題文藝の確立を提唱する所以のものも一にこゝに存する。

然らば、問題文藝とは抑々如何なる文藝を意味するか。私は之に對して卒直に答へよう。そ

れは、何よりも先づ差別的重壓の下に惱みつゝある被差別者の、惱みを通してのイデオロギーの如實なる表現であり、客觀的には部落解放を目的として書かれた所の、所謂目的意識を有つた文藝でなければならないと。この點、私の提唱する問題文藝は、プロレタリア文藝乃至は農民文藝と、その理論的規範を一にする。從て、それらの文藝に於ては何よりも先づイデオロギーが重要視され、作品それ自體が行動を意味しなければならないやうに、こゝに於てもまた、そのイデオロギーが何よりも先づ重要視されなければならないと同時に、行動としての作品が約束されなければならないのである。言葉を換へて言へば、作品自體直に部落解放運動の一翼として、社會的に或は個人的に働きかけるものでなければならないのである。

要之、私の謂ふ問題文藝とは、部落解放をその全的目的として書かれた文藝の謂に外ならない。そして我々が今日希求し翹望する問題文藝こそ實にかかる文藝である。この意味に於て、それが如何に巧みなる形に於て表現されてゐようとも、問題が單なるテーマを出でないような作品ならば、今後我々にとつては何等の價値にも値しないであらう。我々の求めるものはその作品的價値よりもむしろ、實に虐げられた魂の叫びであり、血みどろなその姿であり、それ等

を通して表現された明確な被差別意識である。

四

我々は嘗て長い間かかる文藝の出現を待ち望んで來た。といふよりも、かかる作品を書いて呉れる天才の出現を望んで來たと言つた方がより正しい。何故ならば「天才出でよ」といふことが、今日までの我々の合言葉だつたからである。

だが、時代は既にかかる氣休めを言つて滿足してゐることを許さなくなつてゐる。事實あてにならない天才の出現を待ち望むことは、百年河清を待つに等しい。誰か天才が出て「アンクル・トムス・ケビン」のような傑作を書いて呉れることは勿論望ましいことであるが、でない限り、我々は我々自身の手によつて、かかる文藝の確立を期するより外に途が無いであらう。

問題文藝の確立ーこれも又我々の急がなければならない、重要なる仕事の一つではあるまいか。（四年五月）

七月の感想

去る五月二十日の東京朝日新聞の學藝欄では「文藝盛衰記」といふ欄に於て、特殊部落なる文字を使用してゐる。曰く「その俳句の世界たるや、依然として他の文學事業の外に超然としてゐるかの如き觀がある。むしろさ樣に取扱はれ、一般にはさ樣に敬遠されてゐるといふのが實狀である。一種の特殊部落である。さうしてその特殊部落の住民たちも、それを何とも思はずに生活してゐるのだから、いよ〳〵もつて天下は泰平である…」云々。私は之を讀んで早速同社學藝部宛一本抗議を申込んで置いた。すると折返し、學藝欄の記事に關し御注意を辱うし御厚情を感謝する…云々との挨拶があつたが、何にしてもかゝる文字がいま頃、しかも東京朝日新聞ともあらうものに堂々と使用されてゐるといふのは何とも呆れ果てた次第である。この文字は明かにこの場合、直接の賤稱とはなつてゐない。が、それが如何なる場合に使用されてゐようとも、その「場合」は問題ではない。問題は、かゝる文字を使用することそれ自體

にある。しかるにそれが社會の木鐸たるべき大新聞に使用されてゐるのであるから、全く呆れて物が言へない。

これと同時に私は最近、アルス發行の英文叢書中の平田禿木氏譯註にかゝるワイルドの「新生」の中に、Pariahといふ言葉が××と譯されてゐるのを見た。で、早速手許にある大正九年三省堂發行のポケット辭書と、昭和二年研究社發行の岡倉氏の辭典を調べてみると、岡倉氏の辭典の方には流石に見當らなかつたが、ポケット辭典の方には、矢張り同樣の譯があつた。これでみると、少しく古い辭書には恐らく同樣の譯が施されてゐることと思ふ。考へただけでもたまらない氣持がする。

以上は最近私の眼に止つたほんの僅かな例であるが、少しく注意して探せば、かうした事實は恐らく枚擧に遑あるまい。そして、かうした事實を見るにつけても泌々と思ふことは、社會が如何に融和問題に無關心であるかと言ふことである。嘆ずべきかな、この無關心！

×

レッド・スキンといふ映畫を見た。パラマウントのトーキーで、テクニカラアの非常に美し

い映畫である。テーマはアリゾナ洲の赤色人種を取扱つたもので、ずつと以前に來た「滅び行く民族」を何となく思はせるものであつた。ストオリイは勿論所謂アメリカ物を出でないものである。戀愛と活劇とを適度に織り交ぜてハツピイ・エンドで終つてゐる邊り、どこまでも典型的なアメリカ映畫である。しかし、この映畫を見て感心したことは、この映畫が民族的な色彩によつて色濃く彩られてゐること、同時に如何なる妥協をも許さない熾烈な民族意識によつて貫かれてゐることである。この色彩とこの意識は恐ろしいまでに觀る者の心を壓迫する。これほどまでにまざ〳〵と民族性の根強さを表現した映畫は全く珍らしい。

次にこの映畫で心を惹いたのは、主人公ウイング・フツドといふ青年が、白人の大學で差別待遇を受ける場面である。この幾つかのシインは文字通り私の心を釘づけにした。そこでは幾度か「インディアンー」といふ賤稱が投げられた。そして足が揚げられ、手が飛んだ。私はこのシインを眺めながら、東西軌を同うする人情の淺猿しさを痛感しないでは居られなかつた。

問題關係者は一度見て置いて損をしない映畫である。（四年六月）

歳晩雑記

今年も殘り少くなつた。歳晩らしいさわめきは流石にまだ聞えないが、しかし、やがてこの年も暮れるであらうことを考へると、流石に落付かないものがある。今更仕殘した多くの仕事があるやうな氣がする。あれも仕て置きたかつた、これも仕て置きたかつたと、一年間の怠惰が悔まれる。かういふ反省の道德は、或は今日のスピード時代から考へると輕蔑さるべきものかも知れないが、不幸にして明治年間に生れた私には、何事でも、この頃の若い人のやうにあつさりと思ひ切れない。それが私を憂鬱にし、孤獨にする。しかし、それが又私を、この血みどろな人間の問題へと追ひやるのである。だから私にとつてはこの道德は、決して悲しむべきものではない。私は喜んで、勿論或時は諦めて、この道德に縛られるのである。

×

濱口内閣は金解禁を一枚看板にしてゐる。そしてどうやら、愈々近く、之を斷行する模樣で

ある。しかし、我々がいちばん濱口内閣に期待してゐるものは、決して金の解禁ではない。それよりもむしろ、幾多の重要なる社會政策的施設の徹底的實現である。

金の解禁も勿論、國家の重要問題には相違ない。しかしそれならば、他の緊急解決を要すべき幾多の社會問題も又、等しく國家の重要問題たるに變りはないのである。しかも現内閣はその在野時代に於て、屢々、社會政策的施設の徹底を期する旨を聲明してゐる。してみれば、社會問題の解決に意を注いで、社會政策の徹底を期することは、現内閣當然の責任であり義務でもある。

我々は決して、金解禁に反對を叫ぶ者ではない。しかし、そのために他の重要なる社會問題を無視するが如きことがあるならば、斷じて默過することは出來ぬ。殊に我々の最も期待するのは、部落問題に對する對策である。安達内相は嘗てその在野時代に於て、本問題に對しては最善の努力を拂ふ旨を屢々我々に誓つてゐる筈だ。願くばその約束を、一片の空辭たらしめずして完うさせて貰ひたいものである。

現内閣は、かの減俸問題で蒙つた不人氣の回復策に、今や焦慮苦心中であるかのやうである。

そのため、婦選問題、軍縮問題等をひつさげて、新らたに起たんとするかの如くに見える。だが、眞に人氣の回復を念願するならば、更に素晴らしい方法がある。それは部落問題をひつさげて起つことだ。蓋し三百萬同胞の生命に關する問題をひつさげて起つことは、それ自身一の悲壯なる英雄的行動を意味するからである。單なる不人氣の回復策として利用されることは、部落問題のいさゝか心外とする所ではあるが、全然顧みられないよりはマシである。歴代内閣の如何とも爲す能はなかつた本問題が、現内閣によつて解決の緒に就いたならば、現内閣の功績、それより大なるはないであらう。

×

問題文藝に關する問題が、次第に各方面の注目を惹くやうになつたことは、喜ぶべき傾向である。

一口に問題文藝と云つても、今の所極めて漠然としてゐる。從てそれが如何なる文藝を意味するかに就ては、色々議論の餘地があるであらう。だが、それは今日左程重要な問題ではない。今日最も重要なる問題は、問題文藝といふ總稱によつて云ひ現さるゝ所の文藝作品の製作、延

いてはその確立である。そしてそのために、何を措いても望みたいことは、全國の同志の結束である。

目下、中央融和事業協會で募集してゐる戯曲の成績が、どんなものであるかはまだ聞かないが、假にかうした機會に問題文藝運動の烽火を擧げることが出來たら、これに越したことは無いと思ふ。研究、會合、製作、戯曲の上演、或は映畫化等、この方面の仕事は無數にある。願くば來年こそは、その力强い第一歩を踏み出したいものである。(四年十一月)

融和運動の前衞としての青年

一

何時如何なる時代に於ても、時代を導いて行くものは青年である。青年は常に新らしき時代の建設者であり、指導者である。

明治維新の大業を考へる時、我々の眼前には髣髴として幾多青年志士の面影が浮ぶ。明治維新の大業を爲し遂げたものは、實に當時の青年であつた。勿論、そこには如何ともすることの出來ない時代の勢はあつたではあらう。が、それを洞察し、それを指導してあの大事業を爲し遂げたのは、全國幾十萬の吉田松陰、木戸孝允の熱と力であつたのだ。青年の努力を措いて、明治維新の大業は考へられぬ。

部落問題の解決を考へるに當つても、我々は全國幾十萬の青年の力に期待しないでは居られない。否、この深刻にして悲痛な人間問題を解決し、眞に明るい、平和と喜びに滿ちた社會を

建設することこそ、青年にのみ許された特權であると考へる。この特權を認識し自覺して、一齊に奮起しよう。建設者の誇を以つてその最後の一人の解決にまで起ち上らう。

二

部落問題は現下のあらゆる社會問題中、最も解決至難の問題とされてゐる。思ふにそれは他の社會問題の多くが何れも資本主義の發達に伴ふ近代的所產であるに反し、長き傳統と人間感情の所產であるがためである。だが青年の努力は遂に、あの維新の大業をも見事に完成した。青年の熱と力は部落問題が如何に至難な問題であらうとも、必ずや之を解決せしめないでは置かないであらう。否、全國幾十萬の青年が奮起したならば、その解決の如きも實に易々たることを私は斷乎として確信するものである。

その爲に私はこゝに、部落解放運動の前衞として、全國青年融和聯盟の結成を提唱したい。即ち全國各融和團體に於ける中堅青年をオルガナイザーとして、細胞組織的に全國同志青年の一大聯盟を結成し、以て融和運動の最前衞たらしめるのである。或はそれが至難ならば、現に結成されてゐる「全國解放同盟」を基本とし、更にこれを細胞的に再組織してもいい。何れに

しても、要は全國同志青年の獲得とその結成が眼目である。單なる職業的融和運動の聯盟であつてはならない。

かくして之を全國的に動員したならば、運和運動の上に最も華々しい効果を擧げ得るであらうと確信するのである。

三

融和運動行詰りの聲を聞くことも久しい。之には種々原因もあるであらうが、その最も有力なる原因の一は、從來の融和運動に於てあまりにも青年を閑却し過ぎてゐたからではないかと考へる。その證據には、青年を重要視してゐる融和團體に於ては、着々と効果を擧げてゐる。

若い者を尊重しないのは、兎角日本人の惡い癖である。日本はそのためどれだけ多くの損をしてゐるか知れない。部落問題に於ても、從來の元老組はもういい加減に勇退して、その地位を青年に讓り、青年をして思ふ存分、その熱と力を發揮し得るやうに仕向けたならば、融和運動も今少しく生彩と活氣を帶びるに至るであらうと考へる。今日の融和運動を更生せしめ、清新潑溂たらしめるためにも、このことは斷じて必要である。（五年一月）

融和運動か自覺運動か

融和運動に新らしき指導精神が要求されてゐる。融和運動の今日までの指導精神は反省であり、懺悔であり、差別觀念の打破卽ち差別撤廢であつた。所が、融和運動は今や將に方向を轉換して、之等の指導精神を揚棄し、內部的自覺運動として進まうとしてゐるのである。

從來、融和運動に威力がなく、又融和運動が今日行詰つてゐるのも、要するに確乎たる指導精神が無かつたからに由る、根柢がぐら〳〵してゐたからである、とは、嘗て屢々言ひ古されたことである。かくて、新らしき指導精神を要求する聲は、かなり以前から一部指導者の間に喧しかつたやうに憶えてゐる。所へ今度は水平運動の衰頽である。部落問題の全的解決を希ふ者は、否が應でも考へなければならない。融和運動を自覺運動として進めよう、內部的自覺へ積極的に働きかけることをその指導精神として行かうといふ考へは、かくして起つて來たのである。

故に、この現に要求されつゝある新らしき指導精神の必然性は、一には融和運動そのものゝ行詰りと、今一つは水平運動の衰頽である。即ち、一は融和運動そのものゝ行詰りを打開しようといふ目的と、今一つは融和運動は今日殘されてゐる唯一の部落解放運動である、してみれば從來の如き單なる差別撤廢運動では不徹底である、どうしても水平運動に代るべき有力なる運動たらしめなければならないといふ所にあるのではないかと思ふ。

故に平たく言へば、形の變つた新らしい水平運動をこゝに確立しようといふ議論になる。現に、融和運動の上に今日要求されつゝある指導精神は、水平運動が嘗てその指導精神としてゐたところのものである。してみれば明かに、從來の水平運動とはやゝ行き方の違つた水平運動を、こゝに確立しようといふことになるのである。

以上は單に現象として今日表面に現れてゐる事實に對する觀察に過ぎない。そこで問題は、然らば果して現在の融和運動に於てそのことが可能であるか否かにある。だが、こゝには一言注意を要する。それは融和運動の解釋である。即ち、融和運動を如何に取扱ふかの問題である。だが、かゝると所謂融和運動の本質論に逆戻りする虞れがある。よつてこゝでは、今日融和

團體によつて現に爲されつゝある運動なりと解釋して置く。

さて、かゝる解釋の下に、そのことが果して可能であるか否かの問題である。即ち今日の融和團體のたて前、及び所謂運動關係者に於て、從來の融和運動を自覺運動として進展せしめることが出來るかどうかの問題である。

かう言へば、現在の融和團體とその關係者をひどく見くびつてゐるやうに聞へるかも知れない。だが、眞意は決してさうではない。しんじつ、實際問題として之を考へる時、そこに少なからざる危懼を抱くからである。

なるほど水平運動は「我等は部落民のみの團結によつて絶對の解放を期す」と勇敢に行動して來た。だが、それは水平運動だつたから始めて可能とされたのである。そこにこそ又自主的解放運動としての權威と誇りがあつたのである。水平カルトもその故に始めて意義を持ち、價値づけられたのである。だが、この事が所謂融和運動に於て、果して可能であらうか。

部落の全的解放を期するに非されば、部落問題の解決は不可能である。その故に、融和運動は直に部落解放運動でなければならない！　私は豫てから考へてゐる。融和運動を目して、假

に、水平運動の姉妹運動なりと呼んで來たのもそのためである。その自分にとつて、融和運動の上にかゝる新らしき指導精神が要求され、水平運動に代つて進展せんとしてゐることは何よりも大きな喜びである。しかし、ひとたびそのことの果して可能であるか否かに思ひ至る時、私は未だ多大の不安無きを得ない。融和運動が全然質的轉換を行つて、自主的解放運動として更生すれば兎も角、でない限り恐らく豫期の如き効果は得られないであらうことを恐れるのである。

融和運動か自覺運動か。我々の今日考へなければならない當面の問題はこれである。從來の融和運動をして如何に自覺運動たらしめるか。これこそ一九三〇年度の融和運動の上に課せられた課題でなくてはならない。

尙、私は現に要求されつゝある指導精神そのものに就ても多少の意見を持つてゐる。そのことに就て一言したい欲望にも驅られる。が、この度はたゞ以上の疑念を投げかけるに止め、他日を期したいと考へる。（五年二月）

融和運動の轉換策

「同和」新年號に載つてゐる貴志二彥氏の「融和運動革新への私觀」は近頃面白く讀んだ好文字である。

氏はその中で融和運動不振の原因が、先づ第一に運動の中心が漸次野を離れて堂上に昇つたがためであること、次に運動の形式的な方面ばかりが重要視されて本質的に深められないがためであること、カルトを缺いでゐること、センチメンタリズムに賴り過ぎて來たこと等々……を指摘してゐるが、殊に私の興味を惹いたのは「融和運動の新展開は、以上の諸沈滯邪路の原因を打ち破つてゆくしか正しい一途はないであらう。私一個の考へとして、又個人としての立場からして、私は言ふ。先づ融和運動に眞空の內部的素地を奪還しなければ駄目だと信ずる。野に本動運の生命を再び求めなくてはならないのだ。これを得るためには先づ新らしい野の、內部の運動者を發見し、養ひ、而して運動前線に續々配置しなければならぬと思ふ。其處に運

動前線は、この新手の而も痛烈な被差別者の苦惱の活き活きした實感を有する勇士によつて新生命を盛り返すであらう。これ等の新運動者を發見し、且つ養ふには、その對象は第一に云ふ迄もなく內部青年でなければならないのは當然である。第二には目覺めたる所の外部青年であらう…」と融和運動の第一線に立つべき青年闘士の出現を翹望してゐることである。

融和運動不振乃至行詰りの原因は、貴志氏も述べてゐるやうに多々あるであらう。が中でもその最も有力な原因は、從來融和運動なるものが、所謂職業的融和事業家の手に委ねられてゐたことにあるのではあるまいか、と考へる。獨り融和運動と言はず、あらゆる社會運動は常にその運動に携はる當事者の態度とイデオロギイを反映する。融和運動がはつらつたる生彩を缺き、常に不活潑で活動が鈍く、中途半端で至極あいまい模糊としてゐたのは、勿論そこに確乎たる指導精神が無かつたからにもよるが、一にはそれに携はる當事者の態度乃至はイデオロギーが、しかくあつたからだと斷定しても過言ではあるまい。そして又そのことの根本的な理由は、何よりも彼等が職業的融和事業家であつたからである。（先輩諸氏よ、この言を許されよ）とするならば、貴志氏の言つてゐるやうに何等因襲に捉はれない新らしき青年闘士を發見し養

成して第一線に配置することこそ、融和運動打開の何よりの急務ではあるまいか。

私も夙にその必要を痛感してゐる一人である。この事に關しては偶々「融和時報」二月號に於ても一言して置いたつもりである。が、私はこの問題に就て今少しく具體的に考へてみたい。それはかうした抽象論でなく、融和運動の主力として、早速全國的に有志青年を結成し青年融和運動を起す事なのである。「融和時報」と重複する虞れがあるが、要するに私の考へを要約すれば、取敢えず現在全國の融和團體に所屬する有志青年を打つて一丸となし、一大聯盟を結成して第一線に立たしめる事、それも出來得れば貴志氏の所謂「痛烈な被差別者の苦惱」を有する內部青年を中心とする事、之を基本として新らしき闘士の發見と養成に努め、漸次新しき活々した闘士を追加補充する事によつて自らなる新陳代謝を行はしめる事なのである。さうすれば戰線は常に生彩と活氣に滿ち、不振と行詰りは立所に打開されるであらうと信ずるのである。しかし、そのためには何よりも先づ、先輩諸氏の理解と寛容が必要である。

水平運動が過激？　視されるまでに活氣と生彩に滿ち〳〵てゐたのは、勿論その心がけと態度が眞劍であつたからにもよるが、その有力なる原因は、その運動が常に青年闘士を中心とし

て行はれてゐたからによる。我々はこの點を見逃してはならない。

融和運動は水平運動とは自らその立場を異にする。(少くとも現在に於ては)從て、嘗ての水平運動に於けるが如き行き方を、直に融和運動の上に望むことは無理かも知れない。しかしあの悲壯にして眞劍な態度、あの死物狂ひの血みどろな態度は、心がけ次第によつては直ちに移植することが出來る。この心がけ、この態度こそ、融和運動の不振と行詰りを打開して之を轉換せしめる何よりの方策ではあるまいか。我々はこの點に關しても又、從來如何に運動の上に熱と力を、一言につくせば眞劍味を缺いでゐたかを考へないでは居られないのである。

願くば一九三〇年度に於ける融和運動は、嘗ての水平運動に於けるが如き眞劍さを以て進展せしめたいものである。そのためにも何より切望に堪えないことは、全國有志青年の奮起と、力强き結成である。(五年二月)

融和運動とセンチメンタリズム

融和運動に於けるセンチメンタリズム排擊の聲も、昨今新らしき傾向として興味がある。この聲は今の所、まだ輿論とまではなつてゐない。しかし、一部論者の間にはかなり力强く叫ばれてゐるやうである。そして、私もまたその必要を痛感してゐる一人である。

何故、融和運動に於けるセンチメンタリズムを排擊しなければならないか。その理由は勿論一二にして止まらない。が、何よりも根本的な理由は、それが融和運動の緊張を弛緩させ、その鋒先を痳痺せしめるからである。一言に云へば融和運動を低調安價ならしめるが故である。このことは今更こゝに言葉を費さなくとも、何人も容易に首肯出來るであらうと思ふ。

故に、融和運動に於けるセンチメンタリズム排擊の理由は、換言すれば融和運動を緊張せしめ尖鋭化せしめ、權威あらしめんがためである。殊に今日の如く融和運動が行詰り、新らしき打開策が必要とせられつゝある時代に於ては、このことは絶對に必要である。私は融和運動行

詰り打開の方策は、先づ部落問題の生々しい現實を再認識することから出發しなければならないと考へてゐる。我々にとつて今日何よりも必要なことは、この現實に對する科學的な觀察、研究、把握である。何が部落問題の現實であるかを明確に認識し、之をつかむことである。即ち今日必要なものは安價な自己感傷ではなくて、冷嚴劍の如き科學的態度でなければならないのである。

然るにセンチメンタリズムは常にかかる態度と相反撥する。さうして現實を直視しようとする理智の眼を覆ひ、安價な自己滿足へと誘引する。皮相な表皮への一瞥を以て滿足し、その深奥を究めることを拒絶する。花の美しいことは知つてゐるが、では何故に美しいかは究めようとはしない。こゝにセンチメンタリズムの排擊されなければならない何よりの理由がある。

しかし、部落問題の現實はも早や、單に花が美しいとばかりでは滿足してゐることは出來ない。何故にそれが美しいかを究めなければならない時代に到達してゐるのである。

今日までの融和運動は或はセンチメンタリズムを以てしても事足りたかも知れない。事實、從來の融和運動の指導精神は、それが安價なセンチメンタリズムに陷り易い多分の宗教的、倫

理的、人道的要素を持つてゐた。してみればこの傾向は一面から見れば、極めて自然な傾向でもあつたと言ひ得るのである。だが、これからはさうは行かない。その故にこそ融和運動は行詰つてゐるのである。新らしき指導精神が要求されてゐるのである。センチメンタリズム排擊の聲もこゝにその必然性をもつ。

如何なる社會運動もその發生的時代に於ては、常に多分にセンチメンタリズム的な要素を持つてゐる。融和運動又然りであつた。この事實はあらゆる社會運動に於ける歴史的必然的過程として認めらるゝ事實である。融和運動もまた、その歴史的必然的過程を過程して來たに過ぎない。かう言つてしまへば、それでも濟む。しかし、今日の融和運動はも早や、その發生的な時代ではない。そんな時代は疾うの昔に濟んでしまつた筈だ。今頃はもういい加減に大人になつて、一人歩きの出來なければならない時である。それに何時までも幼稚なセンチメンタリズムでは、社會運動の名が泣くであらう。センチメンタリズムを清算して新らしきリアリズムの第一歩を踏み出すことも、一九三〇年度の融和運動に要求したい一事である。（五年二月）

議會と融和問題

一

融和問題が始めて議會に現れたのは、今から二十餘年前、第二十二議會が最初である。卽ち明治三十九年の第二十二議會に於て、岡山縣人長田治太郎氏から、官公吏採用に關する差別撤廢の請願が代議士西村丹次郎氏の紹介で衆議院に提出せられたのを以つて嚆矢とする。それ以前に於ては民間からも議員からも、この問題は問題として議會では取扱はれてゐない。のみならず、當時は大政治家と稱せられる人々であつても、議政壇上で平然と、所謂差別的言辭を弄して憚らない有樣であつた。だが、時代の力は遂に被差別者を動かすに至り、かく議會に對する請願運動を起さしめるに至つたのである。

降つて大正八年の第四十一議會に於ては、奈良の松井庄五郎氏外九名の連署になる差別撤廢の請願が提出され、同時に福井三郎氏等より部落改善に關する建議案が提出された。建議案と

しては之が最初のものである。

次で大正十年第四十四議會に於ては廣島縣人筒井鐵藏氏より部落稱呼廢止請願が提出され、第四十六議會（大正十二年）にはかの横田千之助氏等より因襲打破に關する建議案が提出された。又翌大正十三年の第四十八議會に於ては、再び松井庄五郎氏外二名から融和事業促進に關する請願が提出され、續いて第五十、五十一議會には岡山縣法律期成同盟會代表者より差別的言動取締法制定に關する請願が提出された。而して最後に第五十、五十一、五十二議會に對して行はれたかの全國融和聯盟を中心とする大議會運動をもつて、融和問題に關する對議會運動は一段落をつけてゐるのであるが、この間更に第四十六議會に於ては星島二郎氏が地方改善事業に關する質問書を提出し、第四十八議會に於ては丹下茂十郎氏が、第五十一議會に於ては有馬頼寧氏がそれぞれ融和事業、又は水平運動に關して政府に質問してゐること等も見逃すべからざる事實である。（以上主として三好伊平次氏著「融和事業概論」による）

二

融和問題をめぐる議會運動史を概觀すれば大體以上の通りであるが、この中に於て最も華々

しく且つ最も大なる効果を收めたのは、何と言つても全國融和聯盟を中心として行はれた議會運動である。

今その經過を簡單に記すと、當時、全國の最も有力なる融和團體によつて結成されてゐた全國融和聯盟では、夙に部落問題に關する國策確立の急務を感じて第五十議會以來運動を續けてゐたが、大正十五年第五十一議會の開かるゝに當り、部落問題の國策確立に關する請願を貴衆兩院に提出し、更に同樣の建議案を全院一致の贊成の下に衆議院に提出、三月二日の本會議に上程されることとなつてゐたが、例の松島事件を中心とする泥合戰に禍されて遂に上程を見るに至らなかつた。

第五十一議會に於ける建議案の運命がかくの如くだつたので、全國融和聯盟では更に翌年第五十二議會に對して再び同樣の建議案を提出することとなり、同建議案は望月小太郎氏外十八名の名によつて再び衆議院に提出され、遂に三月一日の本會議に上程された。そして有馬頼寧氏熱辯を振つて之が提案理由の說明をなし、その後數回に亘る建議案委員會の審議を經て三月二十二日の衆議院本會議で滿場一致可決された。

次に貴族院では三月十九日に至り、二條公爵外十二名の名によつて同樣の建議案が提出され、同月二十二日の本會議に上程、清岡長言子より提案理由の說明あり、阪谷芳郎男の贊成演說があつて滿場一致可決された。かくして前後三ケ年に亘り、全國融和聯盟を中心として行はれた議會運動は、豫期以上の効果を收めて終了したのである。

三

以上が融和問題をめぐる對議會運動の大體の經過である。

顧みれば融和問題が始めて議會に現れてから既に二十餘年の歲月が經つ。二十年と言へば實に五分の一世紀である。しかも融和問題が始めて議會に現れた明治三十九年と言へば、漸く日露戰爭の終つた翌年である。我國はその間あらゆる方面に、如何に異常なる進步發達を遂げたことであらう。今から當時を顧みると實に隔世の感がある。

所が融和問題のみは獨り昔のまゝである。實に舊態依然たりである。變つたと言へば全國に三十有餘の融和團體が出來、そのため約七十萬圓の國費が計上されるやうになつたこと位なものだ。それ以外にどれだけ、融和問題が面目を一新したか。日に月に進み進んで止まる所を知

らなかつた近代日本の發展過程にあつて、獨りこの問題のみは慘めにも取り殘されて來たのだ。二十年といふ長い間、否半世紀以上に亘る六十餘年間！こゝに歪められたる日本の姿がある。こゝに不健康な暗い日本の一面があるのだ。

融和問題は漸次解決しつゝありと言ふ。所謂融和の實は擧りつゝありと言ふ。それを否定しようとは思はない。又さうあれかしと心から望む。しかし、現實は屢々我々の光明と希望をみじんに粉碎する。何時になつたら……我々の胸裏を去來するものは、常にかうした思ひである。願くばかゝる思ひをして一日も早く光明と希望に變ぜしめよ。融和問題をめぐる議會運動を顧みるにつけても、切にさう希念せざるを得ない。（五年四月）

問題文藝漫語

問題を作品の上で取扱ふのは實に六ケしいとは、屢々聞く聲である。その意味は色々にとれるが多くの場合、この言葉は問題自體を厄介視する所から來てゐる。卽ちうつかり書けない、下手に書いて抗議でも申込まれたら大變だといふのである。

然し思ふにこれは、餘りに問題にこだはり過ぎるからではないかと思ふ。白紙で問題に臨めばそんな心配は起らない筈だ。この言葉自身、一の差別意識を表現するものではないだらうか。

×

A。問題文藝にはイデオロギーが必要だと君は言ふね。どんなイデオロギーが必要なのだ。

B。一言に盡せば、被差別者としてのイデオロギーだ。卽ち、虐げられたる者の思想であり感情である。が、それだけではまだ說明出來ない。更に必要なのは被壓迫階級としてのイデオロギーだ。何故なればこの二つは離して考へることの出來ないものだからだ。かるが故に、問

題文藝に求めらるべきイデオロギーは、この二つを内容とするものと見て差支ない。

A。とすると結局、プロレタリア文藝に被差別者意識をプラスしたものになりはしないか。

B。一寸そんな風に考へられないことはない。がこの場合に於ては、主體はどこまでも被差別者としてのイデオロギーだ。そしてプロレタリアとしてのイデオロギーも又、このイデオロギーを通して説明せられなければならない。こゝが君の觀察とは違ふ所で、こゝに問題文藝の特性があるのだ。

×

もう何か一つや二つは、すばらしい問題文藝が現れてもよささうに思ふ。地方の若い連中の中には、きつとさうした熱意に燃えてゐる者もあるだらうが、願くば筆を呵して一大傑作を發表して貰ひたいものだ。

既成作家にはも早や何も期待出來ない。期待出來るのはたゞ無名の青年ばかりだ。

それにしても何かそうしたグループが欲しい。問題文藝作家同盟でも作つてみたらどんなものだらう。（五年八月）

隨感一束

小學校の修身書の中に、融和問題を理解せしめるための一項目を入れることは、融和事業研究會で長い間研究され、近き將來に何とか具體化されることと期待してゐるが、之と共に必要なことは、今日の師範教育に於て、同問題を理解せしめる爲の適切な方法を併せ講ずる事ではあるまいかと思ふ。幾ら、小學校の修身書の中に融和問題に關する項目を挿入しても、かんじんな教師の頭が出來てゐなければ何にもならない。そこで先づ、現役の教師に之を理解せしめることが何よりの急務であることは言ふ迄もないが、更にその豫備軍たる師範學校生徒に之を及ぼすことも忘れてはならない一事であらうと考へるのである。と言つても今こゝに成案がある譯ではない。それは他日研究の結果に俟つこととしてこゝでは一の提言にとゞめ、敢て識者の批判に俟つ次第である。

×

ジャーナリズムが排撃すべきものかどうかはしばらく措いて、今日がジャーナリズム全盛の時代であることだけはたしかである。新聞紙の無い生活を考へることが不可能であると同様に、ジャーナリズムをマイナスした生活を考へることは出來ない。ジャーナリズムは今日現代人の生活要素の重要なる部分を形成してゐると言つていい。ジャーナリズムが現代人に對して持つ威力の絶大なることを、今更ながら認識しないでは居られない譯である。

そこで考へられることは、ジャーナリズムを利用することによつて期待出來る、社會的反響でゐる。

我々は嘗つて融和問題の領域に於て、それに關する宣傳の極めて下手であることを遺憾として來た。だが正しい意味に於て、我々は嘗て我々の趣旨精神を、如何に社會的に宣傳すべきかを眞面目に考へたことがあつたらうか。國民融和デーの如き一時的催しに際しては、なるほどその具體的宣傳方法に就て、幾らかの智惠をしぼつたかも知れない。だが、絶えず社會的に之を如何に宣傳すべきかを考へて來たとはどうしても見受けられない。融和運動がその努力の割合に社會的に認められず、常に損な立場に置かれてゐるのは一にはその爲であると思ふ。これ

は何人も一考すべき點ではあるまいか。

宣傳と言へば語弊がある。が換言すれば宣傳とは一定の目的物を社會的に認識せしめることである。どんな運動でも社會的反響を目的としないものは無い。融和運動でも同様社會的反響が大であればある程運動の效果も之に正比例する譯である。してみれば運動の趣旨精神を社會的に徹底せしむることは何よりも必要なことであつて、そのためには宣傳が必要だと言ふことになつて來る。そしてその方法として最も賢明なる方法は、最も社會的效果の多い今日のジャーナリズムを利用することが一番であらうと考へるのでる。

×

南阿聯邦が日本人の差別待遇を撤廢したといふ最近のニュースは、近頃愉快なことの一つである。こんな當然過ぎるほど當然なニュースでも、矢張り我々には愉快にひゞく。國内の差別待遇が撤廢されたら更にどんなであらう。

それにしても南阿のやうな世界の四等國、五等國でさへ、正義人道の何ものたるかを辨へてゐるのだ。世界の一等國たる日本よ！御身は何時まで眠つてゐるのか。（五年十月）

感想二つ

融和問題に對しては大別して二つの意見があるやうである。一つは融和問題は理窟では割り切れない感情の問題であるから、之が解決は極めて困難であるといふ悲觀說と、今一つはこんな問題は自然の推移に委せて置いても、社會狀勢なり社會通念なりの推移變遷によつて自然に解決出來る問題であるから決して悲觀するには當らないといふ樂觀說である。そして前者はこの問題に相當の經驗と造詣を持つた所謂專門家の間に多く、後者はこの問題にあまりタッチしない一般人士の間に多いのも興味ある事實ではないかと思ふ。

どんな問題でもその渦中に入つて研究すると益々その問題の深さと廣さを感じて來るものである。さうしてそこに必然に專門的な幾多の研究が生れて來る。人生とは何ぞやの問題を究明するための哲學の問題にしても、その最も發生的な時代から今日に至るまでの歷史を概觀すると、よくもこれだけの問題が複雜多岐に亘つて廣く深く研究されたものかと、今更ながら驚か

される。

融和問題は學問ではないが、しかし、その理論的、若しくは實踐的過程は、矢張り一つの歷史的、必然的法則の下に發展して行くことは免れない。從てそこに一つの研究的態度が生れて來るのは極めて當然なことである。同時にその態度は問題が複雜であればあるだけ、專門的になつて行くことも又免れ難いことである。言葉を換えて言へば、問題は深入りすればするほど益々困難となり複雜となつて行くのである。融和問題の專門家の間にかうした悲觀說の生れて來るのも、一にかゝる結果ではないかと思ふ。

之に反して後者の樂觀說は、言ふまでもなく認識不足の議論である。この議論を推し進めて行けば、融和運動の必要は無くなる。そればかりでなく、一般的に言つてもかゝる議論は無價値である。何故ならこれは一種の自然放任論であつて、かゝる議論は營々としてよりよき社會を目ざして進みつゝある人類の歩みを、否定することになるからである。

だがこゝに一つの學ぶべき點は、この說の持つ論據ではなくて、態度ではないかと思ふ。即ちその樂觀的な態度である。かゝる要素が今日の融和運動には今少しく多分にとり入れられて

もよいのではないかと考へる。

融和問題はもと〳〵深刻悲痛な人生問題である。

この問題の面は多く暗い。所へ持つて來て將來への希望がいよ〳〵少いとなると、いよ〳〵やり切れないことゝなる。其結果は決して運動の上にもよき效果を齎らさない。專門的に入つて行くことはいゝが、そのために山に入るもの山を見ずで、將來への見透しを失つて徒に悲觀するのは問題のために決していゝことではない。我々は無產運動の鬪士達が、困苦と壓迫に堪えながら、何時も希望を持つて朗かな氣持で戰つてゐる、あの氣持で我々の融和問題にも對したいと思ふ。

彼等が朗かなのは常に希望があるからである。融和問題と雖も希望が無い譯ではない。否、解決の可能を信ずればこそ戰つてゐるのである。たゞ問題はより多く希望を持つか、否かにある。融和問題に樂觀は勿論禁物だが、しかし常に悲痛がつて將來に輝いてゐる希望の光から顏を背けようとする態度も、一種のセンチメンタリズムとして排斥しなければならないと思ふ。要は希望を持つて常に朗かに最善を盡すことである。最善を盡して成らざれば、又何をか言は

んやと言つた風な、明朗な態度が欲しいものである。

×

私は時に友人達の間からさへ差別的な言辭を耳にすることがある。これは勿論極めて稀で又全然異つた他のグループの友人の間からではあるが。そして勿論その多くは、抽象的間接的な說明語として使用されるのであるが。だがそんな時私は何時も慄然として、背中に冷たいものを感じないでは居られない。

こんな經驗は獨り私のみの經驗ではあるまいと思ふ。恐らく讀者の中にもかうした經驗の持主が居られることゝ思ふ。友人の傾向が單一であれば、勿論こんなことは有り得ないが、仕事を異にし、方面を異にし、又趣味性格を異にしてゐる友人の中には、往々にしてかう言つた手合が無いとも限らない。そしてなまじこれが友人であるだけに情けない氣がするのである。

しかし私は一面かう言つた友人を啓蒙し、よき理解者たらしめることも重要な仕事の一つだと考へてゐる。かう言つた友人のあることは情けないことではあるが、導きやうによつてはよき同志たり得ないことはない。

否、自分の身近かに居る友人であればあるだけ、その可能性は多い譯である。現に私はさうして獲得した、今によき同志である一人の友人を持つてゐる。かう言つたわからず屋が身近かに居ることは情けないことには相違ないが、しかし又こう言つた意味で又あながち悲觀するには當らないかも知れない。

融和問題に携つてゐる各人が、めい〳〵一人の隣人の蒙を啓けば、それだけ問題は解決する譯である。更に啓蒙されたそれらの人々が之を隣人に及ぼせば、問題は更に解決する譯である。一人の友人の啓蒙は取るに足りないやうだが、かう考へて行くと馬鹿にならない。小より大へ、少數より多數への擴大運動を我々は常に日常の生活に於て心がけたいものである。（七年八月）

二、時事小言

感情を一掃せよ

理窟は既に明かである。幾度繰返したつて同じことだ。今更融和問題に就て、異論を挿む浚曉漢はあるまい。が、吾人の尙聲を大にして叫ぶ所以のものは、未だ差別的事實の現存するが故である。而して、吾人はかかる事實の前に、遂に沈默する事能はないのである。

或者は言ふであらう。時日の問題があらうと。差別問題はさう短兵急に、一朝一夕で片の付く程、しかく單純な問題ではないと。成程、一千年來の因襲と傳統に蝕まれて來た頭だ。一朝一夕に癒す事は出來ないといふのかも知れない。が併し、吾人をして言はしむれば、そはたゞ單なる自己辯護に過ぎない。そして、自らの誠意なきことを暴露するものでなくてはならぬ。

何故に時日が問題であるか。何故に時期を待たなければならないのか。過を改むるに、何の躊躇を必要とするか。苟くも正義人道に對し、誠意と熱情を有するならば、直に起つて正しきに就くべきではないか。因襲傳統、抑々何するものがあらう。

要之、理窟は既に明らかである。殘されたる問題は、たゞプリミチイブな感情の問題に過ぎない。社會は此際、かの忌はしき一切の感情を捨て、虚心坦懷、友愛の握手の手を、敢然と差出すべきである。（大正十三年六月）

機會均等の實を示せ

差別撤廢の鐘も、鳴ること既に久しいものだ。併し現實を顧みる時、吾人は今尚、前途遼々たるの感を懐かざるを得ない。

なるほど社會は少しは覺醒したであらう。人々は少しは人間の尊嚴を知り、價値を悟ったであらう。そして又、かの忌はしき差別觀念の次第に艾除されつゝあることも事實ではあらう。併し見よ、差別的事實は依然として現存してゐるではないか！

社會は今尚部落民の名に於て、我等同胞の一部を差別してゐる。被差別者としての部落大衆には今尚職業の自由がない。均等の機會がない。そして部落大衆は依然として不幸であり、前途は依然として闇黒であるのだ。この事實は一體どうしたのであるか。吾人は今更ながら頑迷固陋なる社會に驚き、且つ聲を大にして叫ばざるを得ない。部落大衆に均等の機會を與へよと。

而して若し、當局にして誠意あるならば、率先以てその實を示すべきであらう。（十三年十月）

國民總動員の秋

あらゆる社會問題の中融和問題こそは、最も先に解決を急がなければならない重大問題である。社會は今深く思ひを潜めて何故にこの問題がしかく重大なる問題であるか、何故にかかる問題が今尚殘存して居るかを考へなければならぬ。

凡そ社會惡に對しては、社會それ自體が責を負はなければならない。況んや理れなき因襲によりて一部同胞を差別し、今尚ほ暗黑の世界に彷徨せしめつゝあるこの悲しむべき現實に對しては、社會は當然責を負ふべきである。のみならず社會は一日も早くその不合理と罪惡に覺醒し、敢然として自ら是正すべきである。これこそ、社會の當然擔ふべき義務であらうと思ふ。

今や融和問題は、たゞに一部專門家の手に委せ置くべき問題ではない。社會全體、國民全體の名によつて、解決しなければならない重大問題である。吾人は總ての國民が本問題に覺醒し、併せて本問題解決の爲に、直に協力奮起せん事を希望して已まないものである。（十四年二月）

世良田事件と融和團體の使命

世良田事件は近來の一大不祥事である。それは恰も明治初年の暗黑時代を髣髴せしめる。舊態依然たる偏見と觀念の前に、慄然たらざるを得ない。殊に近來暴力の横行甚しく、直接行動を隨所に見聞する事多き時、部落問題の上に、今またかかる現象を見る事は、この際愼重に考ふべき、重大問題でなければならないと思ふ。

世良田事件の原因に就ては、微妙なる幾多の原因があるようである。が、それが水平運動に對する誤解からにせよ、或は謂ふ所の徹底的糺彈に對する反感からにせよ、要するに無自覺なる封建的差別觀念に胚胎してゐるものである事は論を俟たない。玆に恐るべき禍根がある。

部落問題の前途は、今尚困難である。舊來の陋習、封建的賤視觀念は、尚牢乎として拔くべくもない。殊に水平運動に對する誤解、反感の恐るべきことを思はなければならぬ。この際融和團體の使命は益々重大なりと言はなければならない。（十四年四月）

敬遠的傾向に就て

A。僕は今日が部落問題の重大なる危機のやうに考へられるが、君はどう思うかしら？

B。と言ふと、それはどういふ意味に於てだ？

A。一口に言ふと、社會に新たな差別意識が醸成されつゝあるやうに僕には考へられるからだ。成程、部落問題が重要なる社會問題として認識されて以來、殊に水平運動の發生以來、少くとも心ある人々がこの問題に對して覺醒したであらう事は僕も否定しない。或は覺醒しない迄も、少くとも良心の有る人間であつたならば、恐らく無關心であり得ないであらう事は信ずる。この意味に於て、部落問題は兎に角幾らかづゝでもその解決に近づきつゝあると言ふ事が出來るにもかゝはらず、僕がさういふ所以のものは、その一面に於て近時この問題に對し、といふよりは寧ろ直接部落大衆に對し、敬遠的態度を採らんとしつゝある傾向が、一般社會に感じられるからだ。しかも、相當理解あるべき人々にさへこれが感ぜられるのは、部落問題のた

めに實に悲しむべき事實であらうと思ふ。これは或は融和過程に於ける、避くべからざる一の現象ではあるかも知れない。殊に徹底的糺彈等に影響され易い、過渡時代の己むを得ない事實ではあるかも知れない。併し、僕の憂ふるのはむしろ今日以後にある。今日、この敬遠的傾向がそのまゝ推移し、遂に固定化するやうな事があつたら、それこそ一大事だと思ふのだ。

B。君の考へ方は、すこしく神經過敏のやうだ。だが、そんな傾向が勿論無いとは言はないし、それが如何に融和の目的を阻害し、部落問題の前途に、如何に巨大なる暗影をかざす虞のものであるかは僕も承認する。しかし、すべてはもう少し、時日といふものを考慮に入れて考へる必要がありはしまいか。何と言つても未だ過渡時代だ。殊にその傾向を以て、直に新らしい差別意識なりと斷定するのは、未だ早計のやうに僕には思はれる。何事も今少しく、時の推移を見る必要があらうと思ふ。それからでも遲くはないではないか……勿論、かかる傾向の存在は、しつかりと考慮の中に入れ、また絶えず、深甚なる注意を怠つてはならないだらうが……。（十五年一月）

國策樹立の急務

部落問題は我國に於ける國家的病源である。而してこの病源の根絶せられざる限り、我國の社會的不安は永久に去らない。國民の幸福と安寧は永遠に確保せられないと言つてよい。これ我等の本問題があらゆる社會問題中最も注目すべき重要問題であつて、何よりも先に解決を企圖しなければならない重大問題であると、屢聲を大にして叫ぶ所以である。然るに政府はかかる重大問題に對して、今日迄果して如何なる對策を講じて來たか。

元より我等はそこに何等の對策もなかつたとは言はぬ。しかし、それは如何に無力にして不徹底極まるものであつたか。今日政府の採りつゝある方針の如き、到底我等は意を安んじて、かかる大問題を託する事は出來ぬ。しかも、深刻なる差別的事事は依然としてその跡を絶たず、差別意識に胚胎する忌しき不祥事は今尚頻々と相次いで起り、怨嗟と不安の聲を我等は到る處に聞く。政府はかゝる現狀に對して、又何をか言はんとするであらう。

今は姑息偏狹なる手段を弄して一時を彌縫し、或は一部の團體に之を委ねて平然たるの秋ではない。たゞに社會政策的見地よりするも、本問題の解決は國家的最大の急務である。我等はこの際、政府が一日も早く國家的大計を確立し、積極的に本問題に對して國家的病源の根絶を期すべく最善の努力を拂うやう、衷心から希望して止まないものである。（十五年二月）

第三者的意識を去れ

部落問題が今日尙振はない所以は元より色々あるであらうが、その大なる原因は如何に差別の不合理と人間冒瀆の罪惡を聲高く叫んでも、國民の大多數が恰も之を他人の問題であるかの如く思惟し、無關心に聞き流し、眞實に耳を傾けないが故であらうと思ふ。而して、この問題をしかく誤認謬想せしめ、對岸の火災視せしむるものが、冷やかなる第三者的意識に在る事は言ふ迄もない事である。

○

部落問題に對して第三者は無いとは、我等の常に叫んでゐる所である。その最も明白なる理由は、被差別者以外のあらゆる人間は、悉く差別者であると言ふ事にある。故に、これを恰も第三者の問題であるかの如く思惟してゐる人間も、斷じて差別者以外の何者でもないといふ事に氣付かなければならないのである。卽ち部落問題が自分の問題、自分自身の觀念と意識の問

題である事に氣附かなければならないのである。

○

從來の部落解放運動は、かかる社會の迷妄と誤認に對して覺醒の鐘を鳴して來た。我等の高唱する國民覺醒の運動も、全くこの意味に外ならぬ。我等は重ねて、我等の尊敬する兄弟姉妹が、かゝる第三者的意識を去り、自分を深く反省すると共に、この問題を眞劍に考へ、自分の當然爲すべき義務を發見さるゝやう希望して止まないものである。（十五年四月）

國民教育と部落問題

本年四月中旬香川郡上高野小學校に於て、部落兒童が受持教員より不當の暴行を蒙つてゐたので、通りかゝつた同人が之を詰問した所、同校々長は同校保管の誓約書を示して之が破棄を申出で、諒解を乞うた。所がその誓約書には「我組兒童ニハ專ラ禮讓ヲ守ラシメ他組御子供衆ヨリ輕侮ノ言語及行爲ヲ被ルトモ能ク忍耐セシメ、決シテ口論爭鬪ヲナサシメサルコト。就學兒童ニハ務メテ風儀ノ改善ヲ圖リ、身體及衣服ヲ清潔ナラシメ裸體、跣足ノ如キ異樣ノ風ヲナサシメズ、殊ニ雨天ノ際ハ傘及ビ笠ヲ用ヒシムルコト」等幾多の差別的文字が記してあつた。同人達は之を發見して更に驚き、校長の責任を詰ると共に一方直に縣學務課を訪れ、この事實を突きつけて善後の處置を迫つた云々と、九月一日發行の「水平新聞」は報じてゐるが、誠に驚くべき事實であると言はなければならない。

今日、小學校に於てさうした差別的言動が、以前のやうに頻繁に行はれてゐやうとは決して

考へない。確に以前に比すればさうした事實の尠くなつてゐる事は承認出來る。然しこゝにもその一例があるやうに、今尙ほ、さうした事實の存在してゐる事に、我々は氣付かなければならぬ。而して我々は日々、斯くして純眞そのものの如き兒童等の心に忌はしき賤視觀念の芽生えが植ゑ付けられ、一方何等罪なき無心の子弟が、不合理なる因襲の下に耐え難き痛苦を嘗めつゝある事に思ひ到る時、實に慄然たらざるを得ないのである。國民教育の重要なるは今更言を俟たぬ。しかも、部落問題に於て更に然りである。そして恐らく、部落問題解決の最後の鍵を握るものは、今日の國民教育に在ると言つていい。時代を承け繼ぐべき第二の國民を今日の忌はしき賤視觀念から救ふものは、實に國民教育を措いて他に無いからである。

然るに、その學校に於て、今日尙かかる悲しむべき事實を我々は屢々發見するのである。何と言ふ矛盾、何といふ痛恨事であらう。我々は今更ながら教育者と社會に向つて、かかる事實の前に三省せよ！　と絶叫せざるを得ないと同時に、更に當局に向つて、之が適當なる對策を要求してやまないものである。（十五年九月）

福岡聯隊事件と當局の態度

福岡歩兵第二十四聯隊と、九州水平社との確執は近來の痛恨事である。この事件は去る五月福岡聯隊の一兵卒が差別的言辭を弄したるに端を發したものであるが、以來數ケ月の久しきに亘る兩者の折衝もその効なく、今日に至るも未だ解決の曙光だに認められない樣子である。誠に遺憾此上なき事と言はなければならない。

しかし、この問題は聞く所に依ると、既にもつと早く解決してゐなければならない問題である。それが、遷延今日に至つた罪は、一に軍當局の不誠意に在るやうである。即ち、謝罪講演會の開催に際し、水平社側の些々たる落度を理由として前言を翻し、之を拒否したるが如き、明かに當局の冷淡なる態度を物語るものでなければならぬ。のみならず、當局はその後水平社側の再三の誠意ある交渉に對しても耳を傾けないのみか、却て益々强硬なる態度を持し、反對に挑戰するが如き態度に出たといふことである。實に遺憾千萬な事と言はなければならない。

軍隊内に於ける差別問題は、たゞに部落問題上より見て重大なる問題なるのみならず、軍隊それ自體にとつても、一刻も忽せにすべからざる大問題である。この意味に於ても、軍當局は常に深甚なる注意を拂ふと共に、かかる問題に對しては最善の態度を以て臨むべきである。然るに之を枝葉末節に拘泥し、何時までもその責任を廻避するが如きは、寧ろ當局のために採らざる處である。

水平社側の些かの手落などこの際問題ではない。要は軍當局が一切の虚飾と感情を捨て、虚心坦懐その非を非として認むるにある。この問題の結果の將來に及ぼす影響の甚大ならん事を思ひ、その圓滿なる解決を希ふと共に、敢て軍當局の三省を促す所以である。(十五年十一月)

時言二題

行詰りか否か

融和運動が行詰つた、といふ聲を聞くと同時に、融和運動者が疲れて來たといふ聲を近來聞く。そしてこの二つはどうやら離して考へる事の出來ない相關々係を持つてゐるやうである。何故なら、融和運動が行詰つたといふ有力な原因の一つに、運動關係者の疲勞といふことが數へられてゐるからである。事實は果してどうであらうか。

之に對する答は勿論二つしかない。しかし不幸にしてこの觀察は一面の眞實を物語るものではないか。といふのは、若しもそれが錯覺でないならば、這般開催せられた融和團體協議會に於て、少くともその一班は證明されてゐると思ふからである。でなければあの會合があれだけの盛觀を呈しながら、尙且つ一抹の寂しさを感じさせたものは抑々何であらう。あの時出席者各位の顏が著しく疲勞してゐるかに感じられたのが、獨り私のみのひが目であれば幸である。

水平運動はどうした

水平運動もその後一向にパッとしない。新らしい更生への歩みは一體どうしたのか。長い苦難の後に起ち上つた水平運動だ。如何なる困難をも乘越えて命がけで進まなければならない水平運動だ。それが、折角捲土重來を期しながら掛聲ばかりで進まないのは一體どうしたのか。

そこには勿論いろ〳〵な事情があるであらう。だが、如何なる事情があらうとも、それは水平運動そのものゝ不振を辯護する理由にはならない。何故なら、生命がけでやる仕事の前には如何なる障害も物の數では無い筈だからだ。要は何よりも實行第一である。一人でも二人でもいい。叫び、動くことだ。そこには必然に百の叫びが呼應し、百の活動が約束される。實動の前に權威するものは何ものも無い筈だ。（昭和四年七月）

時事偶感

この頃しみ〴〵感じることは、融和運動がひどく靜かになつたといふことである。靜かになつたと言へば人聞きがいいが、要するに調子が低くなつたのである。更に之を言ひ換へれば熱が無くなつたとも言へるし、氣が拔けたとも言へる。何れにしても潑溂たる色彩が無くなつたのである。

議論は拔きにして、この現象は例の中折といふ現象かも知れない。人間にもかういふ時代は一生の中必ず一度や二度はある。してみるとこれは例の不可避的必然的現象といふ奴で、案外心配しなくてもいいことかも知れない。さうありたいと望む。が、それにしてもかういふ氣の拔けた狀態はやりきれない。張合が無いことおびたゞしい。靜かなのを通り越していさゝか淋しくなる。

がむしやらな元氣がさう何時までも續くものでは無いことは、わかり切つてゐる。だが、されば

と言つてかういふ狀態も決して健康であるとは言へない。これが中休みしてゐるのだといふのなら話はわかるが、若しも疲れて起てないのならば、强精劑でも飲ませる必要がある。果してその必要はないか。

何れにしても、融和運動がひつそりしてゐることは淋しい。來年こそは何とかして元氣よく起ち上りたいものである。（四年十一月）

第八回大會と水平運動の將來

水平運動の將來如何の問題は、部落問題に關心を有する者にとつて、絶えざる興味の中心である。否、單に興味の中心であるばかりでなく、水平運動の消長が、直に融和運動に影響する今日に於ては、融和運動の側から言つても、寧ろ自分自身の問題として、眞劍に考へなければならない問題であらうと思ふ。水平運動に對する敬遠主義は、今日に於ては甚しき時代錯誤である。融和運動の陣營内に於て、今日尙、水平運動を白眼視する者があるとすれば、それは甚しき近視的短見であると云はなければならない。水平運動に於ける悲痛にして切實なる要求、主張こそ、部落解放運動をして權威あらしめる唯一のものではないか。水平運動を盲目的に禮讃拜跪することは元より戒しむべきことには相違ないが、さりとて、之を不當に評價して理由なく白眼視することは、又同樣に戒しむべきことである。部落解放運動の前衞としての水平運動の正しき價値を認識し、その健全なる發展を希ふこそ、眞に部落解放を希念する者の採

るべき態度ではあるまいか。

○

水平運動の將來如何に對して、最近的確なる示唆を與へたものは、過日名古屋に於て開催せられた第八回全國水平社大會である。卽ち同大會に於ては、多年の懸案であつた政治的行動を可なりと決議してゐるが、この事實は水平運動の將來を考へる上に於て、極めて興味ある事實である。

この事實は一面から云へば、水平運動この數年來の不振と行詰り打開の轉換策として、當然豫想されてゐた所のものではある。從て、そこに何等異とするに足るものは無いにしても、水平運動がアナーキズムを淸算して、こゝまで進出したことは、何と云つても一大飛躍であると云はなくてはならない。のみならず、それが實際にどの程度まで可能であるかは兎も角として水平運動將來の動向を決定したものと見て差支ない。この意味に於て、今度の第八回大會は極めて意義深きものがある。

尤も聞く所によると、一口に政治的行動を云々しても、そこには思想的に幾多の段階があり、

従て直に同人を打つて一丸とした政黨の樹立などは到底困難のやうである。従て差當つては、既成無產黨に行くより外は無いであらうが、それで果してどの程度までの政治的進出が可能であるかも疑問であり、その前途には未だ幾多の難關があると見なくてはならない。故に、第八回大會の決議を以て、直に水平運動の將來を豫想することは少しく早計であるかも知れないが、何れにしても水平運動が、今や新しき道程に向つて出發せんとしてゐることは事實であり、又よかれあしかれその結果が、融和運動の將來に影響する所も少からざるものが有るだらうと考へる。轉換せんとする水平運動のよき發展を希ふと丶もに、それが、部落問題の全局に好影響を與へるやうに期待して已まない次第である。（四年十一月）

同人の議會進出を支持せよ

第五十七議會は遂に解散となつた。そこで、この際考へなければならないのは、同人の議會進出である。

去る昭和三年の總選擧に於て、同人中何名立候補し、その成績がどうであつたかは、今はつきり記憶してゐないが、多分立候補者は全國で七八名？位で、その成績は當選者はおろか、次點まで漕ぎつけた者も一人も無く、次點第二位が最上の部で、その成績は甚だ振はなかつたやうに憶えてゐる。かくて、期待された普選最初の總選擧に於ては、同人の議會進出は見事失敗に終つたのである。この事實は抑々何に基因するか。

その有力なる原因の一は、經濟的關係によること勿論であらう。選擧に未だ多額の費用を要する我國に於ては、選擧運動費の多寡が屢々當落の運命を決定する。してみれば運動費の不足は、既にその條件に於て三割も五割も損であると言はなければならない。だが、それも畢竟選

舉民の自覺如何によることである。一方に於ては多額の費用を要せずして當選してゐる者のある事を思ふ時、運動費の多寡必ずしも當落の決定的鍵を握るものとも考へられないのである。

では、それ以外に何に由るであらうか。曰く選舉民の自覺の足らざること即ちそれである。言葉を換えて言へば、同人候補者に對する支持が不足してゐたからである。若しもあの際各地の選舉民が、何が故に同人を議會に送らなければならないかを認識し、同人候補者を徹底的に支持支援したならば、恐らく一人殘らず當選の榮冠をかち得たであらう。斯くして前回の總選舉に於て同人候補者の振はなかつたのは、經濟的關係によるよりも寧ろ主として以上の理由に由るものと見て差支へないのである。そしてこゝに、何人も考慮しなければならない餘地が存するのではあるまいかと考へるのである。

同人の議會進出に就ては、最早議論の餘地は無い。來るべき總選舉に於ては、一人でも多くの同人を議會に送らなければならぬ。願くば今度は前年の如き不成績を再び繰返したくないものである。各地の選舉民の自覺と、同人候補者への徹底的支持を、今から望んで止まないものである。（五年一月）

差別的言動を取締れ

差別的言動取締法制定の問題は餘程以前から喧しく論議されてゐる。にもかゝはらず、未だその決定を見ないやうである。思ふにこれは融和運動關係者の側に於て、未だ之に對する決定的意見が見出せないからではあるまいかと思ふ。

即ち、差別的言動を取締らなければならないことは何人も異論は無い。しかし、そのため法を特定することが、問題解決上果して好結果をもたらすかどうかゞ議論の中心となつてゐるのである。少くともさう見受けられるのである。そしてこの事はたしかに一應の理窟として認められる。しかし、この頃のやうに、頻々として差別的言辭を發見するに至つては、も早やそんなことを言つては居られないのではないかと考へるのである。

×

舊臘十二月二十日の北澤樂天氏筆になる時事新報漫畫附錄は××なる文字を數ケ所に亘つて

使用してゐる。しかもそれは漫畫であるが故に、餘計に深刻なるものがある。同社では直に之を取消し、謝意を表したとの事であるが、甚だ怪しからぬ次第である。

所が、之は獨り時事新報のみとは限らない。つゞいて讀賣新聞、萬朝報等にも同樣の文字が堂々と記載されてゐるのである。實に啞然たらざるを得ない。

その他昨年は東京朝日新聞に於て、同樣の文字が二回に亘つて使用されてゐる。帝都の大新聞に於て既に然りである。況んや地方新聞其他に於ておやである。

かくの如く、社會の木鐸たる新聞紙が、××なる文字を堂々と使用するに至つては、も早斷じて默過出來ない。近時、個人的の差別的言動は漸く影をひそめたかに見受けられるが、新聞や雜誌が之に代るのであつてはやりきれない。新聞や雜誌はその社會的に影響する所も甚大である。之に對する何等かの對策は、この際何よりの急務であらうと思ふ。

×

差別的言動取締法制定に就ては、未だ研究の餘地はあらう。が、かうなるとも早やそんなことなど云つては居られないではないか。法の制定それ自體が既に、社會的自覺を促進する上に

多大なる効果のあることをもこの際併せて考へなければならぬ。單なる謝罪や取消廣告などでは也早や無意義である。一日も早く適當なる取締法を制定して、かゝる忌むべき言辭の禍根を絶つべきである。（五年一月）

國民融和デーを意義あらしめよ

記念すべき國民融和日は將に近づかんとしてゐる。來るべき三月十四日こそ國民偕和の實を擧ぐべき日である。全國民一人殘らず融和問題解決のために思念し、行動しなければならない日である。この日を期して融和問題を清算せよ。これわれ等の衷心よりの願ひである。

○

全國の融和團體は勿論、この日のために最善の努力を期してゐるであらう。或は講演に映畫宣傳に、或はポスター宣傳に、街頭のビラ撒きに、この日は恐らく必死の活動がつゞけられるであらうことを期待する。然り、この日にこそ、融和運動の戰線は總動員され、未曾有の活氣と壯觀を呈するであらう。

だが、この際特に望んで置きたい一事がある。それはこの日をして單なるお祭り騷ぎに終らしめないこと、そのことである。

從來かかる催しは、動もすればその精神を離れて單なるお祭り騷ぎとして終り勝であつた。一見如何にも華々しく景氣よく見えても、それは表面だけの話で、內實は何等見るべきものも殘らないといふのは、屢々我々の經驗して來た所である。卽ち颱風一過の憾が大いにあつたのである。が、こんなことでは結局無意義である。寧ろ爲さざるにしかずである。來るべき國民融和日に於てはこの點を愼重に考慮しなければならないと思ふ。

空景氣をつけて騷ぐよりも、地味に堅實に、眞にこの日を意義あらしむることである。國民一人々々の心を確實にキャッチすることである。國民融和日の目的は、この一事を措いては無い。こゝに又、國民融和日の眞意義がある。

○

何れにしても國民融和日の目的は問題を社會的に認識せしめ、全國民の關心を喚起することにある。之を主觀的に見れば融和運動の戰線を擴大することであり、新たなる分野を獲得することである。あらゆる努力はそのために拂はれなければならない。そのために又要求されなければならない第一のものは熱と力であり、眞劍な態度である。

一人が新らしい同志の一人を獲得すれば戰線は二倍に擴大される。更らに二人を三人を五人を獲得するならば、この日を期して、融和運動は恐らく未曾有の發展を遂げるであらう。かうなれば融和運動の行詰りなども物の數ではない。現下の行詰つた融和運動を更生せしめる上から言つても、願くばこの日を有意義ならしめたいものである。（五年二月）

更に一段の努力を

記念すべき國民融和日は終つた。しかも、今回の融和日はその規模の大なりし點に於ても、又その意氣込のさかんなりし點に於ても、到底前回の比ではなかつた。講演に映畫に、或はビラ、ポスター等の宣傳に、全國的に擧げられた差別觀念打破、融和促進の一大烽火は、必ずや相當の効果を收め得たであらうと確信する。

ことに、今回の融和日に際して愉快に感じたことは東西の朝日新聞社、大阪毎日、東京日日等の大新聞を初めとして、全國の各新聞社が一齊に、この擧を支持して呉れたことである。この事實は今回の融和日をして、更に一段と權威あらしめるものであつた。殊に當日、大阪朝日、毎日等の大新聞が、堂々と社說をかゝげて融和日の趣旨の普及徹底につとめて呉れたことは、何と言つても感謝に堪えない。これらの記事を通じ、或は社說を通じて全國幾十萬、幾百萬の讀者に呼びかけることが出來たことを思ふと、たゞそれだけでも大いなる喜びを禁じ得な

いものがある。更に融和問題に對して、全國の各新聞が極めて冷淡であつた往時を顧みて、實に感慨無量なるものがあるのである。

○

かくして、この度の國民融和日は、外見的には兎も角豫期以上の成果を收め得たと言つてよい。殊に宣傳の行屆いた點では、融和運動始つて以來のことである。

しかし言ふまでもなく問題は、さうした外見的な成績の如何にあるのではなくて、その實績の如何にある。換言すれば果してどれだけの同志を獲得することが出來たか、どの程度まで所謂融和促進の實を擧げることが出來たかどうかにあるのである。而して一度こゝに思ひを致すとき、心中ひそかに寂寥の感を覺えるものは、豈吾人一人では無いであらう。この度の國民融和日が鳴物入りで華々しく擧行されただけ、歡樂の後の悲哀にも似た感を一入深くする次第である。

融和問題の前途は今尙ほ遼遠である。我々の辿る道は坦々たるアスファルトの鋪道ではない。曲折に滿ちた苦難多き荊棘の道である。

同志よ、仕事はこれからだ！我々は更に勇氣を鼓舞して、遼遠にして困難なる道程への第一歩を踏み出さう。

○

國民融和日は終つた。しかし、融和日は、單にあの一日だけであつてはならない。新しく迎へるその日その日を、常に融和日たらしめる心懸けが必要である。

總てはこの心懸けの上に發足する。この心懸けの上に築かれるものこそ、搖ぎなき融和の基礎である。

更らに一段の努力を、全國の同志に望んでやまない次第である。（五年三月）

樂園の破壞者

「汝等幼兒の如くならずんば天國に入ることを得ず」とはキリストの言葉である。子供は天使であり、子供の國は天國である。地上にこれ位ひ、淸く美はしい世界は無い。然るに、この美はしい地上の樂土を屢々破壞するものがある。それは兒童間に起る差別問題である。

學校に、街頭に、家庭に、如何に屢々こうした悲慘事がくり返されることであらう。しかも一度かゝる問題が惹起されるや、地上の樂園は忽にして煉獄と化し去つてしまふ。無心なる兒童間の差別問題！世にこれほど痛々しい社會問題があらうか。

○

小學校に於ける差別問題は殆んど無くなつたとは、何處に行つてもこの頃耳にする合言葉である。果してさうか。

若し然りとすればこれに越した喜びはない。しかし、恐らく之は表面のみの事實であらう。長い因襲と傳統に培れた差別觀念である。未だ兒童の心奥深く巢喰つてゐないと誰が保證出來よう。しかも、一般的に敬遠的態度をとりつゝある今日である。かゝる傾向が矢張り、兒童の心理の上にも影響してゐるのではないか。さうだとするならば狀態は一層惡い。我々の戒心しなければならない重要なる點である。

○

何の罪もない子供である。しかるに偶々部落に生れたるが故に、單にそれだけの理由によつて、いたいけ盛りの子供が差別されるのだ。こんな不合理な、悲慘事が世に又とあらうか。無心な、淸淨雪の如き心に、かかる差別が如何に映じ、如何に影響するかを考へると、實に暗然たらざるを得ない。兒童間の差別問題位ひ、惻々として心を打つものはない。

兒童間に巢喰ふ差別觀念を一掃せよ。樂園の破壞者を驅逐せよ。更に進んで、人間相愛の思想の芽生を植ゑ付けよ。

○

將來、融和問題解決の鍵を握るものは、第二の國民たる兒童である。兒童に如何に融和問題を理解せしめるかの問題は、融和問題の將來を決定する大問題であると言ふも過言ではない。

兒童に對する態度如何の問題は、この意味に於ても重大性を持つ。世の父兄の、又教師諸君の切なる戒心とよき指導を望んでやまない次第である。（五年三月）

政治家に訴ふ

融和問題が重要なる社會問題であり國家問題であることに就ては改めて記す迄もない。然るに政治家は從來この問題に對して、概して冷淡であつた。思ふにそれはこの問題が所謂政治問題ではなくして倫理問題であり、人道問題であつたからであらうと思ふ。もつと突込んで言へば、直接政黨の利害休戚に關する問題でなかつたからかも知れない。

○

だが、この際政治家諸氏に知つて貰ひたいことは、所謂內治外交問題のみが國家の重要問題ではなくして、それ以外にも融和問題の如き重要なる國家問題の存在してゐることである。なるほど、融和問題は今日謂ふ所の政治問題ではないかも知れない。だが融和問題は政治問題ではないなどと考へてゐると、何時しか拔差ならない政治問題化する時が來る。いや今現に來つゝあるのである。之を察知し、事前に對策を講ずることこそ眞の政治家のつとめである。千丈

の堤も蟻の一穴からといふことがある。

○

近時、融和問題の論議さるゝと共に、各政黨とも同問題を政策の中に掲ぐるに至つた。どの程度までこの問題を理解し、それに重要性を認めてゐるかは未だ疑問であるとしても、我國の政黨の一大進歩であると言はなければならない。

この問題の解決は所謂一般國民の自覺反省に待たなければならないことは論を俟たないが、我々の最も期待するものは同問題に對する確乎たる國策の確立である。之を措いてはその根本的解決は至難である。去る第五十二議會に於てはその爲の建議案も萬場一致可決されてゐる。この至難にして痛切なる國家問題を解決するために、政治家諸氏の一層深き理解と努力を切望して止まないものである。（五年四月）

問題文藝を確立せよ

部落問題文藝に關する理論は時々見受けるが、作品は一向に現れないやうだ。これは一面問題文藝に關心を持つよき作家の居ないことの證左にもなるが、また他の一面では、この問題の領域に於て問題文藝の重要性が未だそれ程明確に認識されてゐないことにもよると思ふ。その ため、さうした方面に對する機運が、未だ十分に醗酵し燃燒しないのである。そんな風にも考へられる。

×

しかし、如何なる文藝と雖も、その發生當初に於ては振はないのが普通である。早い話が、今日我國の文壇を席卷してゐるプロレタリア文藝にしても、最初からこんな勢力があつたのではない。先づプロレタリア文藝の必要が叫ばれ、その聲が漸次擴大し理論付けられ、次で作品が現れて、それが漸次成長し、發展して今日に至つてゐるのである。即ちそこには一定の歴史

的段階があつたのであつて、一足飛びに今日の隆盛を來したのではない。

×

それ故に、我々は今日未だ見るべき問題文藝が現れないからと言つて、何も失望するには當らない。否、地方の青年諸君の間には、既に恐ろしい勢ひで、問題文藝の芽生が成長しつゝある。毎月「融和時報」紙上に發表される短篇や實話は、何よりもそれを雄辯に物語るものであり、その將來を約束するものと言はなくてはならない。問題文藝確立の日も遠い將來ではないであらう。

×

融和問題の領域に於て、問題文藝が如何に重要性を持ち、その役割が如何に大なるものであるかは既に屢々述べた通りである。既にさうである以上、最も重要なことは、絶えずその必要を主張することである。そしてその聲を擴大させ、輿論を作り、更にそれを理論づけることである。必要の前には如何なるものでも生れて來る。否、生まないで置かないのが人間である。問題文藝も亦、必要の前には、必らず生れて來るであらう。生れないのはそこにまだゆとりが

あるからである。

×

問題文藝の必要を聲高く主張し、之が確立のために努力しよう。

その文藝を無自覺な大衆の中に送りこみ、歪められた部落大衆の姿を、はつきりと彼等に認識させよう。

問題文藝の確立も亦、我々に課せられた重要なる任務でなくてはならない。（五年八月）

教育者に望む

融和問題の立場から今日教育者、殊に小學校の教師諸氏に望みたいことは決して一二に止まらない。だが屢々言ふやうに何よりも重要で根本的なことは、先づこの問題を十分に理解して貰ふことである。小學校等に於ける差別事件の一半の責は、教師諸君の無理解にあると言つても過言ではない。殊にその前後處置等に遺憾な點の多いことは、我々の屢々見聞してゐる所である。理解のある所に問題は起らない。この問題が如何に深刻な人道問題であるかに一度氣付いたならば、それは直に教育そのものゝ上にも反映して、痛ましい兒童間の差別事件等もその跡を絶つ筈である。

×

「それしきのことは何でもないではないか」「そんなことで怒る奴があるか」

兒童間の差別的言動に對して何よりも慎んで貰はなければならないのは、こんな不用意な言

葉である。かうして問題を輕々しく觀る所に一切の禍根は横はる。この一見第三者には何でもなく思れる事柄も、當事者にとつては實に生命にも値する一大悲痛事であることに先づ氣付いて貰はなければならぬ。これが問題理解への第一歩である。この理解、この自覺が無くては融和問題の重要性は遂にわからない。教育は愛である。愛の無い所に眞の教育は無い。教育を眞に愛の上に打ち建てること、それは教育者の尊い使命であるとゝもに、又問題解決への第一歩でもあらねばならぬ。

×

融和問題解決の上から言つて、今日の義務教育が如何に重要なる意味を持つかは改めて言ふを要しない。若しも今日の義務教育に於て融和問題の何ものたるかを兒童の腦裏深く刻み付け人間愛の精神をその胸底深く培ふ事が出來たならば、それは單に兒童間の今日の痛ましい悲劇を未然に防止出來るばかりでなく、融和問題の大半は既に、解決したと言つても過言ではないであらう。何故ならそれは、やがて近き將來に於ける融和された世界を約束するものだからである。他日、彼等兒童が社會を背負つて起つの日、そこにはも早や融和問題の如き暗影は地を

拂ふに違ひないからである。

×

かくて、融和問題の立場から今日の義務教育に俟つところのものは、刻下の情勢から言つても、又その將來の上から考へても、實に絶大なるものがあると言はなくてはならない。教育者諸氏の理解と協力を切望してやまない所以である。（五年九月）

問題と小唄

相變らず小唄なるものが流行する。その是非に就てはいろ〳〵議論もあらう。が小唄が大衆の心を捉へて行く點には何時もながら感心させられる。小唄は何故そんなに大衆の心を惹きつけるのだらう。

それは何よりも先づ大衆の心にぴつたりと來るからだ。次には誰れでも樂に歌ひこなせるからだ。この二つの要素が小唄の强味であり、恐しい勢ひで流行する所以だ。大衆は自分たちの心にぴつたりした歌ひいい歌であれば何時でも喜んで歌つてくれる。

×

小唄の流行を見るにつけても考へるのは、融和問題にも何かかういつた歌がほしいものだといふことだ。裏長屋のお神さんでも、三歳の童兒でも親めるやうな適當な歌があつたら、どんなにかいいだらうと思ふ。形式は何でもかまはない。要するに誰でも樂に歌へて、知らず識ら

ず口を衝いて出るやうな歌であればいいのだ。「國境警備の歌」がどれだけ國境を守る人々の勞苦を民衆の心に刻み付けたか、その功績ははかり知られない。理窟ではなく感情の問題だと言はれる融和問題に於ては、殊にかう言つた歌のもたらす功果は絶大なるものがあらうと考へるのだ。

中央融和事業協會が何時か募集した歌はその後どうなつたであらうか。願くば秋晴れの空の下に、聲を合せて歌へるやうないい歌がほしいものだ。

敢えて志を同じうする士の御一考を煩す次第である。（五年九月）

青年と融和

或る會の席上で、青年に融和運動をやらせていいかどうか、といふ話の出たとき、やらせるのはいいが、適當にリードしないと危險である、それは青年はやゝもすればその若さにまかせて過激に走り過ぎるからだといふ意見を吐いた人がある。自分はこれを聞いて、これは一應尤もな意見であるが、聊か今日の青年を理解しない話ではないかと思つた。

×

青年は傳統に囚はれない。因循姑息は常に青年の排擊するところである。若さと情熱、青年の有するものはたゞこれだけだ。これが動もすれば青年の行動を矯激ならしむるものとの虞れを抱かしめ易い。しかしこゝで考へなければならないことは、その故に青年の行動が絶えず矯激であるとは限らないといふことだ。つまり、矯激に走る可能性は多分にあつても、いつでもさうとは限らないといふことである。これは區別して考へられなければならない。

×

少しく理窟に走るやうであるが、自分の言ひたいと思ふ點はこれである。卽ち、矯激に走る可能性のあることのみを以て直に青年を危險視するのは、少しく認識不足な議論ではないかと思ふのである。それよりも大切なことは、青年の持つ他のよき一面を今少しく認め、青年を信頼することである。信頼のあるところには必らず責任感が生れて來る。如何に血氣旺んな青年でも、それ相應の思慮分別はある筈だ。今日の青年はそれほど馬鹿ではない。

×

青年の持つ純眞性、情熱、力。世にこれ位ひ尊いものはない。これ等は實に、新らしい社會を建設して行くための原動力だ。青年を措いて新時代の建設者は無いと言つていい。

融和運動も要するに一の社會改造運動である。差別なき社會を建設するための運動が融和運動である。從て當然この運動にも青年といふ原動力を必要とする。否、青年を措いてどこに眞の融和運動がありやと言ひたいのである。（六年七月）

三、問題コント

追憶

冬が來ると、私はよく幼い時の事を思ひ出す。

山陰道の冬は陰鬱だ。深い雪に埋れて、炬燵に當りながら冬を送るのだ。夜、じつと耳をすますと荒い日本海の海鳴りが聞える。老人達から古い昔話を聞きながら、うと〳〵と眠りに落ちて行つた幼い昔、その夢のやうな當時が思ひ出される。

海鳴りが聞えると、「明日は荒れだ」と、よく老人が言ひ〳〵した。するときまつて嵐になつた。私は障子の隙間から荒れ狂ふ吹雪を眺めながら、「雪や、こんこん…」を歌つたものだ。そして私は獨りぼつちで、吹雪を眺めながらよく遊んだ。友達が誰一人遊びに來なくとも淋しくも何ともなかつた。何故なら、私はあの不思議なフェアリーの亂舞、吹雪を眺めるのが何よりも好きだつたから。冬の長い間、吹雪は私のお友達だつた。

しかし、何と言つても春の來るのは樂しみだつた。長い冬に飽き果た私は「早く春になると

いゝな…春は何時來るのだ…」と言つてはよく老人達を困らせた。私は長い冬が逝つて、ねこやなぎの芽がふくらみ、小川の岸邊に若草の萠え出る頃が待たれてならなかつた。

だが、私の春を待つ心は、今一つ他にもあつた。それは春が來ると、あのやさしいたけちやんが出て來るからであつた。

雪が溶け始めるとたけちやんは毎日草履を作つては、私の家に賣りに來た。眼のぱつちりとして愛くるしい、しかし何處か淋しさうな十二三の少女だつた。たけちやんは時々私にも、赤い布を鼻緒に織り込んだきれいな草履を持つて來て呉れた。私はたけちやんが大好きだつた。

「たけちやんのお家は何處？」私は或る時たけちやんに訊いた事があつた。するとたけちやんは「あつちの方…」と隣り村を指した。そしてそれきり何故か淋しさうに眼を伏せた。

何も知らない私はハツとしてしまつた。何となく惡いことをしたやうな氣がしてすまなかつた。私はたけちやんを怒らせたのではないかと心配だつた。しかし、それにしても、たけちやんは何だつてあんな顏をしたのだらう…と私には不思議だつた。そしてこの疑問はその後もかなり長い間、老人達から譯を聞くまで、私の頭から離れなかつた。

町外れにある私の家で最初の荷を下し、それから町に出掛けて行くのがたけちやんの何時もの習慣だつた。時には店先で老人達と一所に、お茶を呑んで行く事もあつた。

春になると、何よりもそのたけちやんが來る…その春が、その頃の私には待たれてならなかつた。

×

今年も冬が來た。靜かな夜、私は火鉢に手を翳しながら、何故ともなく昔の事を思ひ出してゐる。あの故郷の山陰の町は、もう深い雪に閉ざされてゐる事だらう。そつと耳を澄すと、遠い日本海の海鳴りが聞えるやうな氣がする。

だが、それにしてもたけちやんは、今頃はどうしてゐるだらう。この上なく私を愛し、飽きもせず昔話を繰返してくれた老人達も死んだ。私は一切を押し流して行く時の力を感じながら、今、二十年の遠い昔を思ひ出してゐる。（大正十五年十二月）

黎明を待つ心

家風に合はないからと言ふ單なる理由で暇を出されたと言つて、腫れぼつたい泣顔で、妹の松子が訴えて來たのは昨夜の事だつた。

「落度があつたなどゝいふ譯では決してない。それどころか忠實によく働いては呉れるし、ほんとにお前に對しては氣の毒なのだが仕方がない。どうか惡く思はないやうに……。」

先方では然うも言つたと言つて、さも殘念でたまらないと言ふ風に、松子は又しても泣くのだつた。

彼は直に總てを覺つた。全然豫期しない事ではなかつた。がいよ／＼露れてしまつたかと思ふと、流石に何となく諦らめきれないものがあつた。彼は一瞬間、目の先が暗くなつたやうに思つた。

女中のいゝ口があるからと言ふので、松子がM家に雇はれることになつたのは、去年の秋の

末のことであつた。それからまだ、まる三月とは經つてゐなかつた。それにもう、かうした憂き目を見なければならないのだ。彼は松子を可哀想に思ふよりも、憤りが先に立つた。燃えるような怒が全身にみなぎり、身體が小刻みに顫えて來るのをどうする事も出來なかつた。

「どうしておめ／＼と出てなぞ來たんだ。何故理由をきゝ訊して來なかつたんだ。馬鹿！」

我を忘れて彼は妹を怒鳴つた。が、直ぐその後から、しく／＼泣いてゐる妹を見ると、可哀さうになつて來た。それに、松子には何も罪はないのだ、みんな社會が惡いのだ、いやM家の者が惡いからだ！さう思ふと、彼はどうしていゝかわからなかつた。そして何時しか、自分も一所に泣けて來るのだつた。

×

しかし、かうした事は彼等兄妹にとつては、決して珍しい事ではなかつた。現に彼自身も職を失つてからもう二月近くにもなる、失業者の一人だつた。が、自分の事はまだしも我慢が出來た。それに彼が工場を出されたのは、彼が單に、部落民だからと言ふ理由からばかりではなかつた。何故なら、彼は平常から堂々と、自分の身元を名乘つて居たし、又それを承知で雇は

れた工場でもあつた。だから、彼が工場を出された理由があるとすれば、それは寧ろ、彼が同胞のための解放運動の第一線に立つてゐたが故であつた。即ち言葉を換へて言へば、工場の方でさういふ彼を恐れた結果に外ならないのだ。この意味に於て、彼の失業は謂はゞ、運動のための尊い犠牲であつたとも言へる。それだけに又、慰めるものも幾らかあつた。

だが、今度はさうは行かない。そこには一點の理由も見出せないばかりか、徹頭徹尾、それは許す事の出來ない人間冒瀆なのである。

彼の心はM家に對する限りなき憤りの念で燃えた。否、社會全體の頑迷と無情に對する呪はしい思ひで、疼くやうな痛みを感ずるのだつた。

「よし、心配するな。この鬱憤はきつと俺が晴らしてやる！」

彼は自分に言ひ聞かせるやうに妹に言つた。さう言ひながら、彼は何か、もう一刻も猶豫のならないやうな、ひどく緊迫したものを心に感じた。彼は夜が明けたら差當り、それこそM家に紙彈に行かなければならないと決心した。

×

長い夜だつた。その上、しん〳〵と骨を刺すやうな寒さだつた。氷の張るらしい微かな物音を、彼は終夜耳にした。

朝近い冷たい寢床の中で、一睡もしない身體を轉々とさせながら、彼は不幸な妹を思ひ、自分を思つた。更に三百萬の同胞を思つた。

夜の明けるのが、彼は待たれてならなかつた。（昭和二年一月）

不安なる街

彼は遂に解雇された。願に依り解雇す……これが三年間眞面目に勤め上げた彼に對する、會社の最後の挨拶であつた。理由は！　理由は今更説明の要はあるまい。强いて言へばストライキの主謀者と目されたからだ。いや、それよりも何よりも、その根本的な理由は彼が部落民であつたからだ。

彼は組合の幹部であつた。だから當然ストライキの指導者として目され易い立場にあつた。だが、今度の爭議に對しては、彼は最初から傍觀者であつた。と言ふよりも、寧ろ反感さへも抱いてゐた。それはこの度の爭議が、純正の勞働者としての要求からではなくて、腹黑い或る野心家の操る不純な動機に出發してゐたからであつた。

然るに、その彼が爭議の指導者と目されて了つたのである。その理由は彼が偶々組合の幹部であつたからだ。いや、何よりも彼が部落民であつたからだ。部落民だつたから睨まれたのだ。

しかし、それは豫め豫期しない運命ではなかつた。否、部落大衆はかうした運命を悲しくも常に豫期してゐるのだ。遂に來るべき時が來たに過ぎない。

差別が撤廢されない限り、部落大衆にとつてはこの人生は針の蓆だ。オアシス無き沙漠だ。だから、部落大衆にはかうした際に處する一切の準備は常に出來てゐる。それは古の武士が戰場に臨む時の氣持だ。泣くに泣けない悲壯な氣持だ。

彼はその辭令を握つて無言の一瞥を工場監督に與へた。そして決然としてドアを排した。

×

「とうとうやられたよ」

「爭議でか」

「うん」

「ひどいことをしやがるな」

「仕方がないよ。何しろ俺達は部落民なんだからな」

「どうする、やるか」

「放つとかう、爭つたつて始らない」
「でも、いま〳〵しい野郎だな」
「世の中つて、こんなものだよ」
彼は兄弟のAを前にして淋しく笑つた。
汚いドブ板の上には寒さうに薄陽が差してゐる。隣りの子供の襁褓だらう、ハタ〳〵と風にはためいてゐる。何處か遠方を走る汽車の汽笛が、ボウ、ボウ……と聞えた。うす寒い夕暮である。
さう言へば今年も、もう暮である。彼は東京に出てからの五年間を、一瞬間に思ひ浮べた。
「これからどうする?」
「どうするたつて仕方がない。又勤め口でもさがさう」
彼はAの家を出た。
さうだ、又新しい勤め口を、見付けなければならない。たとへ、そこでまた斷はられることがあらうとも……。そして、あらゆる勞働市場が俺の生存を拒否しようとも、俺は最後まで

戰ふのだ。それが俺れ達の戰ひなのだ。又それが俺れ達にのみ許された、たゞ一つの生き方なのだ!
彼は寒い夕風の街を歩きながら、昂然とさう思つた。

×

賑かに街は暮れ、新しい年が廻つて來た。美しく粧はれた街々は、回春の歡びに滿ち溢れてゐるやうであつた。だが、彼にとつては粧はれたこの美しい街も、依然として「不安なる街」であつた。そして、彼は依然として失業者であつた。
或る日、彼はその都會の中央にある、大きなビルディングのエレヴエーターを上つてゐた。この巨大な建物は、何かしら彼を威嚇するやうに思はれた。資本主義を恰かも表徵してゐるやうなこの建物は、全く俺を一呑にするかも知れない。こんな風に彼には感じられた。してみるとこのエレヴエーターは、差當りこの怪獸の食道である!
彼はこんなことを考へながら、やがて一つのオフイスの中に入つて行つた。用件は言ふ迄もなく就職の依頼であつた。

だが、

「折角ですが……」

と、そこの人事係長は言つた。そして冷やかな一瞥を投げ與へたゞけであつた。

あんたんたる日が毎日つゞいた。彼はこの「不安なる街」に仕事を求めて、野良犬のやうに毎日さまよひ歩いた。しかし、結果は毎日同じことであつた。

郷里に容れられなかつた彼は、五年前に「群集」を求めて上京した。「群集」の中こそ、身を置くべき唯一の場所だと彼は思つた。

だが、さうした彼の希望も事々に裏切られて行つた。さうして既に五年といふ歳月が流れた。「都會」といふ集團も結局差別者の集團だつた。彼には依然として身を容れる所が無かつた。

一體、何が俺をこんなに苦しめるのか！今更無駄なことだと知りながら、彼はさう思はない譯に行かなかつた。世の中の一切が呪はしく、いきどうろしく思はれた。

×

夜更けの街は、もうひつそりと靜まり返つてゐる。乃物のやうな風が、砂塵を卷いてごうゞ

うと過ぎる。星も月も、大空に凍てついたかと思はれるやうな寒い夜だ。

失望に打ちのめされながら、彼は深夜の街を歩いてゐた。彼はその夜位ひ、人間の溫い心が欲しいと思つたことはない。この凍てついた天地をもとかすやうな、人間の溫い心が！それは孤獨な者のみが知る、たまらない氣持だつた。

又、それは大聲を擧げて泣き叫びたいやうな、悲痛な氣持でもあつた。

彼はその夜歸つてから、郷里の母に手紙を書いた。

——お母さん。その後お變りはありませんか。この寒さに何時ものリュウマチが出はしないかと僕は心配して居ます。この頃御健康は如何ですか。

今年になつてからお便りしようと思ひながら、何かと忙しいので御無沙汰してゐました。さう言へば、まだお目出度うも申しませんね。後れましたが明けましてお目出度う。そして、今年も母上の御健康を祈り上げます。

私は相變らず會社の方に勤めて居ります。この暮に一寸爭議がありましたが、それも無事解決して、年の改まるとともに益々元氣です。どうか御安心下さい。しかしこちらは相變らず寒

いので閉口です。お蔭げで今年はまだ風邪も引きませんが、冬の間だけは暖かい郷里が戀しくなります。

弟や妹達も變りありませんか。兄も元氣ですか。どうかよろしくお傳へ下さい。そのうち何か珍らしいものでもお送りしたいと思つて居ります。

村の人達にも、どうかよろしく仰有つて下さい。一度歸省してみたいと思ひますが、まだ當分は駄目のやうです。

では、呉々も御身大切に祈ります……。

×

書き終つて彼は、目に熱いものを感じた。同時に不思議なことにはそれとゝもに、輝かしい光明と希望と、決然たる闘志とが、湧然と湧いて來るのだつた。

間もなく、夜も明けるであらう……。（四年一月）

十年後

——或る農村の空想物語——

くつきりと中國山脈が曙の空に弧を描いてゐる。豊かにみのつた稲田が、さわやかな朝の微風にそよいでゐる。鬱ずんだ森の小かげからは威勢よく牛や、豚や、鶏の鳴聲が聞え、いたるところ、ほのぼのと昇る朝餉の煙である。

こゝまでは昔ながらの農村の朝の景色である。だが、一九四一年の電化された農村では朝からラヂオが景氣よく、相場の變動を報知してゐる。坦々たる縣道には新鮮な野菜を滿載した大型のトラックが慌しく疾走し、遙か彼方の山脈の麓の發電所では、灌漑用のモーターが、朝からブンブン唸つて電化時代の威力を誇つてゐる。そして、村の停車場を今離れた汽車は、も早無樣な煙を吐く汽車ではなくて、スマートな電氣機關車に牽かれた四一年型の汽車である。スピード化され、機械化された農村！これが一九四一年の農村の正しい姿である。

だが、こんなことはどうでもいゝ。それよりも筆者はこゝで、とも角かうした四一年の初秋の或る朝、甚作が隣村S村の吉兵衛の訪問を受けたことを語らなければならないのである。

「ちよつくら相談があつてな」

と前置きして、吉兵衛はその相談といふのを切出すのである。それは他でもなく、この秋祭りの直後に盛大な解散式を擧げることになつてゐる、S村の融和團體親交會の解散式の、日取りその他に關する相談なのであつた。

「念を押すやうじやが、皆の意向はいゝちやらうな」

「勿論みんな贊成ぢや。それどころか、今年は豐年でもあるし、かた〳〵うんと盛大にやらうと、よりより相談しとる位ぢや」

「そりや結構じや。かうして兩村とも親類づき合ひをするやうになつてみれば、親交會もも早、役目を果したといふ譯ぢやからな。したが、これは何しろ大問題ぢやから、俺一人の一存では行かんわい。いづれ皆と相談して返事することにしよう」

二人はそれから色んな世間話に小半時ばかり時を費して別れた。

甚作たちのA村と隣村のS村とは長い間不和であつた。理由はたゞA村が部落であるといふたゞそれだけの理由からだ。それだけの理由が長い間A村を差別させ、不和を醸して來たのである。

だが、時勢の力は遂に兩村を完全に融和させて了つた。笑ふべき古い因習と傳統は時とゝもに押し流されて、村と村は昨日と變つて親類づき合ひをするようになつた。そして共同で事業を始め、冠婚葬祭に席を連ねて、この數年來日一日と親密の度を增して行つたのである。

正しくそれは時勢の力であつた。がその蔭にはS村の融和團體親交會の、十數年來の血のにじむやうな、努力のあつたことも忘れてはならない。否、かうした努力があつたればこそ、今日のよき日を見ることが出來たとも言へるのである。

しかし、かうなると融和團體などの必要は當然無くなる。そこで起つて來たのが親交會の解散であつた。甚作は惡夢のような長い過去を顧みながら、今更のやうに時勢の移つたことを思つた。

甚作は吉兵衛を送り出すと外に出た。

陽は既に高く昇つて、村の共同耕地では威勢のいゝ掛聲とゝもに、活潑な勞働が始まつてゐる。誰もが溌潑と、朗かに樂しさうだ。

「ブルーン……」

突然空に爆音が起つた。K市とH市の間をつなぐ定期の旅客飛行機だ。昨年來朝晩一回づゝこの村の上空を往復するぞうになつたのである。苗作はこの旅客機を見送りながら、又改めて時勢の移つたことを思つた。そして心ひそかにつぶやいたのである。

「さて、S村にやる娘の婚禮の日取りは、何時にしたもんぢやらうかい？」（六年九月）

四、事實物語

迷妄より覺めて

——愛のために總てを捧げた女の話——

不合理な因襲が、如何に一部の同胞を今尙不幸に陷れてゐるかに、我々は氣付かなければならぬ。人間が人間を差別する事の、如何に大なる罪惡であるかを知らなければならぬ。迷妄より覺めよ！

○

この物語りの主人公S子は讃岐の丸龜聯隊に近い、或るカフェーの女給だつた。そして彼女は偶々その聯隊に入營中の淡路出身の青年山田久作(假名)と戀に落ちたのであつた。

二人の戀は熱烈だつた。二人の間には末は夫婦に……とまで固い約束が取り交はされ、彼女は男の除隊の日を、一日千秋の思ひで待つてゐた。

やがてその日が來た。しかし男にとつてはそれは却て苦痛だつた。何故なら、彼は部落民と

しての自分の身元を、彼女に知られたくないからだつた。だが、除隊して結婚すれば、當然さうは行かない。彼は苦しんだ。その揚句、一層の事默つて別れようと決心した。彼は孤獨な心を抱いて獨り淋しく營門を出た。

女は勿論男を待つた。けれども、愛する男の姿は見えないのみか、遂に何の知らせさへもなかつた。

彼女はたまりかねて聯隊に駈け付けた。男の住所を訊き合せ、少しばかりの荷物をまとめると、直にその夜、男の後を慕つて旅立つた。

○

男の家では退營祝の準備最中だつた。賑かなさゞめきが入り亂れ、お祭りのやうな騷ぎだつた。

彼女はそこへ、遽しく俥で乘り付けて行つた。彼女の胸は、男に會へる喜びで一杯だつた。だが、男は矢張り彼女を避けた。「大方人違ひだらう。歸して呉れ…」これが男の返事だつた。しかし、彼女は元より肯かなかつた。彼女は決してその間違ひでない事、聯隊で住所までも突止きめて來た事等を告げて、極力家人に哀願した。

男の心は漸やく動いた。それに「同じ歸すにしても、一度會つて歸したら…」といふ家人の切なる勸めもあつて、男ははじめて彼女に會つた。

○

が、男にしてみれば到底添はれぬ仲であつた。彼女と結婚する事は、結局お互が苦しむ事だつた。彼は、それを知り過ぎる程知つてゐた。そんな思ひをするよりも、失張りさつぱり別れよう。それが結局お互のためだ…これが男の氣持だつた。

彼は先づ、自分が部落民である事を彼女に打ち明けた。そして結婚の到底不可能である事を說き、此際お互のために一切を諦め、さつぱりと別れる事にしようと極力すゝめた。

しかし、女の決心は固かつた。彼女にとつては愛は實にすべてゞあつた。愛する男が何であらうと、そんな事は問題ではなかつた。況んや彼女は、一般社會が部落民を差別する事の、如何に無理道な、不合理極まるものであるかを知つてゐた。彼女は涙と共に變らざる愛を誓ひ、男に結婚を迫るのだつた。

○

一方彼女の親達は、彼女の出奔の飛報を町のカフェーから受取つて、どんなに驚いたか知れなかつた。彼女の親達は直に心當りを尋ねた。そして彼女が一里ばかり離れた隣村、即ち男の所に潜伏してゐる事實を漸く知つて、更に吃驚した。(彼女も又男と同郷だつたのである)その理由は改めて記す迄もない。

何しろ彼女の親達にとつては大變だつた。彼女の兄は彼女を連戻さうと、早速男の所に交渉に出掛けた。が、幾度足を運んでも無駄だつた。彼女は頑として肯かなかつた。

親達は當惑した。此上は警察の力を借りるより外はないと考へた。親達は警察に飛んだ。が警察では「死んだと思つて諦らめるがいゝ」と言つて、取合つては呉れなかつた。

親達は失望した。そして思案の果考へ付いたのが、村の青年團だつた。

○

親達の依頼を受けた村の青年團では、早速娘を取返しに行く事になつた。三十五六名の一團はそのため男の村へと向つた。所が早くも之を知つた男の部落では、これも默つては居なかつ

た。村の青年達によつて之に對する準備が直に整へられた。かくて、一人の女を中に、今やこの兩者の間には、恐ろしい爭ひが始まるかと見えた。

だが、幸ひ警察の調停で、事は未然に防がれた。しかも結果は一層良好だつた。それは、部落青年の悲痛なる叫びを聞いて一方の青年團員達が、初めて因襲の迷妄より覺め、己の非を覺つたからであつた。彼等は今更ながら自分達の無智と輕擧を恥ぢ、却て互に將來を誓つて別れたのだつた。

○

その後——この二人の間には子供まで生れて今は幸福に暮してゐるといふ事である。親達の間も亦、圓滿に行つてゐるとの事である。(大正十五年十一月)

或る結婚の話

A。君は大阪の杉田京子(假名)といふ婦人の話を聞きましたか。

B。いや、まだです。それは一體どういふ話なんですか。

A。僕も實は最近聞いた話なんですがね、何でもその婦人――婦人と言つても娘さんですが、その娘さんが無理解な兩親や親戚の猛烈な反對を斥けて、と言ふよりも説服して、見事に部落の青年と結婚したといふ話なんです。

B。へぇ、それは近頃愉快な話ですね。だが本當の話なんですか。

A。勿論本當の話です。現にその婦人を知つてゐる人から聞いた話なんです。しかも最近の話です。

B。で一體、その娘さんといふのはどういふ人なんですか。

A。この春、大阪府下の××で或る團體の融和事業講習會があつたのです。その際何十人か

の講習生にまじつて、熱心に聽講してゐる三人の女性があつたのです。

B。で、その中の一人が彼女だつたといふ譯なんですね。

A。お察しの通りです。所でその娘さんといふのは大阪府下××郡でも素封家として相當に聞えた杉田家の一人娘なんです。しかも人並優れて美しくて、おまけに前年大阪の××女學校を優等で卒業し、今は兩親の膝下にあつて、たゞ結婚の日を待つばかりといふ世にも幸福な身の上だつたんです。

B。そんな幸福なお孃さんが、又何だつてあゝした講習會なんかに出席したんでせうね。

A。何でも以前に島崎藤村氏の「破戒」を讀んでひどく動かされた事があるらしいのです。そしてそれ以來絶えずこの問題に就いて考へてゐたらしいのですね。御存じの通り關西はこの問題の多い所でもありますし、自然この問題に就て見聞する機會も多かつたらうといふものです。それに近代思想の洗禮を受けた若い人の常として、思想的にも色んな惱みがあつたんですね。そんなことでその講習會にも出席したらしいのです。

B。で相手の人といふのはどういふ人なんですか。

A。實は僕もそれはよくは知らないのですがね。何でも最近兵隊から歸つた非常に眞面目な青年だといふことです。

B。しかしそれにしても、結婚とは又よく思ひ切つたものですね。どこまで本氣だつたんですかね。例の一時的な乙女心といふ奴ではないですか。あの年頃の娘さんに共通な、甘いセンチメンタリズムからではないですかね……。だとするとあまり感心出來ませんね。

A。所が、斷然さうではないらしいのです。元來その娘さんは、年の割合にしつかりした頭の持主ださうですが、今度の結婚に就ても餘程深く考へたらしいのです。自分の感情に甘えたやうな所はないか、恩惠的同情的な氣持はないか、又何かさういふ氣持にヒロイツクなものはないかなどゝ、幾度となく自分の氣持をたしかめて、これなら大丈夫だといふので決心したのだといふのです。元々この問題に就て考へてゐた處へ、恰も講習會で深刻な刺戟を受けたので、これこそ自分の行くべき道だと急に決心がついたのですね。何でもその講習會でも、屢々眼を泣き腫らしてゐたといふことです。深刻な問題の實相に觸れて、たまらなかつたのでせう。かなり熱情的でもあつたのですね。

B。それを聞いて安心しました。しかしよく兩親が納得したものですね。

A。それがなか〳〵骨だつたらしいのです。元來田舍の素封家などゝいふものにはわからないのが多いのですが、彼女の家でも御多分に洩れないカチ〳〵で、やれ先祖に對して申譯ないの、やれ家名がどうのと猛烈に反對したらしいのです。全く獨り娘ではあるしこの問題に無理解な兩親にしてみれば氣が氣でなかつたに相違ありません。この點は彼女とても全然豫期しない事でもなかつたらしいのです。が、かうした親達の反對は、彼女の意思を飜させるには何の役にも立たなかつたのです。のみならず、さうして目の當り親達の無理解さを見せつけられると、彼女の方では反對に、愈々その決心が堅くなつて行つたといふのです。そこは誰しも人情ですね。つまり親達の反對は、彼女の決心を愈々鞏固にするためにのみ役立つたに過ぎないのです。——さういふ譯で、何と言つても彼女は肯かない。單に肯かないばかりか、人間が人間を差別する事が如何に大なる罪惡であるかといふこと、部落民と雖も等しく同胞であること、その同胞を差別することが、如何に不合理極まることであるかといふような事を滔々と論じさういふ兩親の考へ方が如何に間違つてゐるかを指摘して堂々と說服に努めたといふのです。

かうなつては親達も幾ら頑張つて見た所で、初めから理窟に合はんのですから叶ひませんやね。が兩親の方ではそんなことでは濟まされないので、では兎に角親族會議を開いて親戚一統の意見を訊いてみようといふことになつたんです。で早速親族會議が開かれた譯なんですが、その結果は親達の豫期した通り、一同大反對だつたんです。そこで親達の方でも急に又勢ひを得て來た譯ですね。で、それ見たことかと、一擧にその娘さんの意志を翻へさせようとしたんださうですが、それも徒勞に終つて、結局親達の方で兜を脱いだといのです。つまり、完全にその娘さんに說服されて了つた譯なんですね。

B。それは愉快だ。しかしいま時偉い娘さんですね。

A。これが普通の戀愛關係から入つて行つたのだと何でもありませんが、たゞ自分の信念だけで行つたんですからたしかに偉いと思ひます。しかも堂々と親達を說服し、遂に兜を脱がしめるに至つては、一寸普通の娘さんには出來ないことです。

B。全く、よくやりましたね。

A。よくやつたものだと思ひます。我々の頭で考へてこそ何でもないことのやうですが、不

合理な因襲の闇が未だ濃く社會を閉ぢこめてゐる今日、纖弱い女性の身で無理解な周圍と戰ひ、見事に、不合理を克服して自己の信念を貫徹せしめるといふことは、よほどの決心と勇氣がなくては出來ないことです。しかも彼女は何一つ不足の無い、惠まれた身の上だつたのですからね。世の無理解な連中に「この婦人を見よ！」と叫んでやりたい位です。

B。全くそんな氣がしますね…いや、おかげで近頃愉快な話を聞きました。近頃の美談ですね。

A。たしかに近頃の美談です。

B。しかし、かういふ女性が出て呉れるやうだと、問題の前途もあながち悲觀するには當りませんね。

A。かういふ話を聞くと、何となく、朗かな氣がします。（昭和三年十一月）

毒を呷る女

君は今ごろそんな馬鹿な話があるものかと考へるだらう。左様、こんな話は全く、一九三一年の今日、有り得べからざる話である。だが、事實はこんな馬鹿々々しい話が、今尙ほ儼として存するのだ。これは最近聞いたばかりの、まだ生々しい實話である。こゝに手短かにそれを紹介しよう。

横山文子といふ女があつた。勿論假名である。彼女は麻布の或る婦人子供服を作る店で働いてゐた。年は今年二十二で、美人といふ程ではないが、愛くるしい人好きのする顏立だつた。

このまゝ何事もなくて濟めば、彼女の一生は全く何も言ふことは無かつたかも知れない。だが、運命は常に皮肉である。運命の神は屢々惡戯をしては人間を試みる。彼女にもやがて試みの日が來たのである。

その店に一人の學生が下宿するやうになつたのは、それから一年ばかり後のことである。そ

の學生は太田(假名)と言つて、K大學の經濟科に通つてゐた。主人夫妻の遠緣に當る者の息子で、血族的にはそれほど濃い間柄ではなかつたが、鄕里の親達か何かの依賴で、その學生の下宿を引受けたものらしい。

話の本筋に歸つて、太田といふ學生がこの店に下宿するやうになつてから、絕えずこの太田の所に遊びに來る一人の友達があつた。山崎文雄(假名)と云つて、太田と同じやうに矢張りK大學の學生だつた。この山崎は太田がひどくムツヽリ屋であるのに反し、朗かで明るい近代的な青年だつた。身裝なども太田などよりはいつもキチンとしてゐた。そしてよく冗談を言つたりしては、店の者達をからかつた。

彼女はこの太田の友人山崎と何時しか親しくするやうになつた。二人の間は加速度を以てぐんぐん進んで行つた。そして數ケ月の後には互に將來を誓ひ合ふような仲とさへなつた。

だが筆者はこゝでさうした間にも、彼女の小さな胸の中には一つの大きな惱みが成長しつつあつたことを特記しなければならない。

その惱みとは何であるか。言ふまでもなく彼女が部落民であるといふことである。たゞそれ

だけの事實に過ぎない。しかもこれが彼女にとつて、致命的な惱みでなければならないとは！

しかし、彼女の正しい理性はやがて彼女の意志を決定するのであつた。彼女は愛する者のために、否、相手を愛すれば愛するほど、總てを打明けなければならないと決心した。そして或日、我女は堅く決意して、彼横山に彼女の惱みの總てを打明けたのであつた。

ところがどうであらう、彼女の秘密を知つた時の横山の顏は！それは彼女の夢にも豫期しなかつた、極度の侮蔑と冷笑で歪められた蒼ざめた顏であつた。彼女は恐らく死ぬまで、その時の横山の顏を忘れることが出來ないであらう。彼女はそれほど、侮蔑の表情を露骨に現はした顏を、未だ嘗て見たことがない。

その後の二人の間がどうなつたかは、改めてこゝに記す必要はなからう。たゞ記して置くことがあるとすれば、その後彼女が男の宿に押しかけて行つて、毒を呷つたといふことである。それが失戀の惱みの結果か、それとも男への面當の意志に出たものであるかは筆者は知らない。が恐らくはその兩樣の意味を持つものであらう。何故ならば彼女も又、世の常のか弱き女性の一人だつたからである。（六年六月）

昭和八年三月二十日印刷
昭和八年三月廿四日發行

融和問題雜記
▽定價六十錢△

著者　楠本寛

發行者　東京市京橋區槇町一ノ一　隆文館株式會社　右代表者　星島二郎

印刷者　東京市深川區牡丹町一ノ七　今井彦太郎

發行所　東京市京橋區槇町一ノ一　隆文館株式會社
振替東京八五三番